
ISアスラン戦記

桂かつら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ISアスラン戦記

【Nコード】

N9728Y

【作者名】

桂かつら

【あらすじ】

あのユニウス戦役から数ヶ月、アスランは事故に遭う。しかし、アスランは死ななかった。

これはアスラン・ザラが異世界で繰り広げる彼の戦記。

第1話 アスラン異世界に立つ

始まりはいつも突然だ。

俺ことアスラン・ザラがこの世界に来てから早1ヶ月が過ぎ去った。日記をこうして書いている訳だが色々と思うところがあるのも事実だ。

だが、俺はこの日記を書いている。

元の世界を忘れない為に。

事のあらましはカガリと喧嘩別れをした次の日のオーブ軍での演習中に事故に遭い気が付いたらベツトの上だった。

最初が病院かと思ったが違ふみたいだった。

俺は混乱する頭を何とか平常に戻し、体の状態を確認した。

体調は良いのに心が晴れないのはカガリと喧嘩別れした挙句に事故に遭ったと言う何とも情けない自分を認識しなければならぬ事が心を重くした。

そんな時だった。

織斑 千冬が現れたのは。

彼女は唐突に自己紹介を始める。

「私の名前は織斑 千冬。このIS学園の教師をしている」

そう言ってきたのだ。

最初は学校に海岸沿いの学校に墜落したのかと鬱になったが演習は海上で行っていたからそんな事が無い筈だと心を落ち着かせた。

そして、自分も織斑先生に挨拶をした。

「自分はオーブ首長国防軍参謀本部所属、アスラン・ザラ准将であります」

ついでで役職と階級を名乗りながら敬礼をしてしまった。

軍人の礼儀を一般市民が何処まで理解してくれるか不安ではあったが軍人の挨拶を一般人にする。

ここまで来ると最早職業病である。

俺をマジマジと見ながら織斑先生はこう呟いた。

「あんな物に乗っていたのだから軍人とは思っていたが……その若さで一国家の参謀本部の准将とは……優秀なのかコネなのか判断が付かないな……」

その言葉に俺は苦笑した。

まあそれもそうだろう。

僅か18歳で参謀本部の准将閣下なのだ。

コネといわれても致し方無い。

そして、織斑先生の言葉で俺は思い出した。

「ジャステイス!! 俺の機体は!？」

今ここに至って、俺は自分の愛機を思い出した。

そして、織斑先生が言ったIS学園なる学校についても疑問を感じた。

矢継ぎ早に質問する俺を織斑先生は何とか落ち着かせると順を追って説明してくれた。

先ず、IS学園とは『IS』インフィニットストラトスなる機動兵器に関連した技術取得の為に各国が融資する日本国内に設けられた専門高等学校であると言う事。

ISとは希代の天才科学者にして天災科学者、篠ノ之 束なる科学者が開発した宇宙空間における活動を目的としたマルチフォーマルスーツであり、その兵器的側面が各国に注目され軍事目的に利用されている事。

何故かISは女性にしか起動する事が出来ず、何時の間にか『女尊

男卑』なる風潮がこの世界にはある事。

しかも、ISの要であるコアユニットは篠ノ之博士にしか生成は不可能で博士自体がコア開発を中止しその数が467個しか存在しないとの事。

その為、各国の政府や一部の国から認可されたIS関連企業がISコアを独占しISの開発を行っている事などだ。

その話を聞いて俺は何とも脆弱で脆い軍事システムだろう。

MSみたいにOSさえ適合すれば訓練しだいでナチュラルだろうがコーディネーターだろうが関係なく乗れると言うのに。

そして、ある疑問が沸き起こる。

何故、『俺にその様な話をするのか?』と言う疑問だ。

その疑問を問いただした時、織斑先生が鋭い目付きをする。

俺はここからが本題である事を理解した。

何故ならあの時の彼女の目は歴戦の戦士の目であり、もし俺が良からぬ輩で何かこの学園に危害を加えるなら容赦しないとその目が訴えていた。

だがしかし、彼女も存外にお人好しだ。

不振な侵入者である俺に何の拘束も見張りも着けずこの様な医務室に放置するのだ。

しかも一応は治外法権が認められているこの重要施設でだ。

俺の世界では考えられない。

しかも、対等の条件で話をする為に護衛もつけずに俺と一対一で話をしている。

本来ならこういう場合は最低でも護衛を一人、戸口に一人つけるのが普通だ。

ソレすらない。

しかも監視カメラや收音マイクすら存在しない。

何とも甘い。

ソレが俺が彼女に抱いた第一感情であつた。

そして彼女は俺の愛機、インフィニットジャスティスの事を説明する。

彼女の話では突如として、18メートルの巨体がISの訓練を行うアリーナに落ちてきたらしい。

その衝撃で近くの職員室の窓ガラスと廊下のガラスが多数粉々に割れたそうだ。

拳句の果てにアリーナの観客席とシールド発生装置がお釈迦で修理するより新しく作り直す方が早い程の被害を出したそうだ。

ざつと見積もっても修繕費が約2億3千万円だそうだ。

不幸中の幸いは今は冬休みで生徒は帰省して殆どいなかったし、墜落したアリーナには人がいなかった事である。

ソレを聞いた瞬間、確かにコレは状況が最悪である事を認識した。

幾ら防御最強のIS技術を応用したシールドでも高さ18・9メートル、重さ79・67トンが遙か上空から落下すれば壊れるに決まっているらしい。

昨日から厄日だ。

カガリと喧嘩別れするわ、演習中に事故るわ、今度は多額の借金が追加だ。

俺は天を仰いでこう言った。

「神よ……俺に何か怨みでもあるのか……？」

と。

その後の話で何とか俺は俺がこの学園に被害を加えるつもりは無い事を理解してくれた。

後、俺の事情も話した。

ジャスティスの所在を問いただした。

その時の織斑先生のあの当惑した。

何と言ったなら良いのやら解らないと言つ表情は忘れられない。

そんな顔で彼女はこう言った。

「ジャステイスだったかあのロボット……いやモビルスーツか……
兎に角、お前の機体はだ……」

「俺の機体は……？」

「ISになつてしまった」

流石の俺もこの時ばかりは間の抜けた声を出してしまった。

「兎に角、明日、見に行くぞ。今日はここで寝ろ」

そう言われ俺は織斑先生が出て行った後こう言った。

「本当に厄日だ……」

と。

そして、眠れぬ夜を過ごした後、俺は早朝、織斑先生に連れられて
地下にある研究スペースに案内された。

そこで俺が見た物は、

ジャステイスが約2から3メートルにまで縮小された姿だった。

しかもPS装甲はダウンしている状態でビームライフルとビームキヤリーシールドをその手に持って立っていた。

「ジャステイス……こんなミニマムになってしまっ……」

俺はそんな言葉しか掛けられなかった。

「いや、突っ込むところコ!? もう少しあるだろ!? 何でISになったとか、本当にコレ俺の機体?とか!!」

織斑先生の突っ込みを他所に俺は真面目に話した。

「確かに見た目はジャステイスだが……動くのか?」

「ボケて真面目な話に無理やり戻すな!! まあ、いい……結論から言えばお前が乗れば動く。しかも、高度なロックが掛かっていて、ディスプレイには『アスラン・ザラ以外の搭乗は認められない』と言う画面まで出てきた」

織斑先生は俺に向き直りこう言った。

「つまり、お前にコレを動かしてもらいたい」

俺はその言葉にこう言った。

「つまり、俺にISが動かせる。と?」

その言葉に織斑先生が頷く。

「ああ、お前は人類で2番目に男でISが動かせる。動かす代わりに日本政府がお前の借金をチャラにするし、戸籍や身分証まで発行してくれる」

借金を盾に脅しか。

拳句、身寄りの無い異世界で身分まで保証とは。

よほど男でISが動かせるのは希少価値が高いらしい。

「さらに来年の四月からIS学園にお前は通ってもらう」

俺の意見は無いですか？

「無論あるとでも？」

心を読まないで！？

こうして、俺ことアスラン・ザラの異世界での生活が始まった。

第1話 アスラン異世界に立つ（後書き）

うん、何だろコイツ、全然アスランじゃないみたいだ……
きつとカガリと別れて精神が病んだのだろうきつと。

第2話 アスラン辟易する

俺は取り敢えず自分に宛がわれた部屋でパソコンを弄りながら考える。

「力をファッションか何かと勘違いしているなこの世界は……」

俺ははISの各国の操縦者達がファッション雑誌のモデルを飾るのをパソコンで見ながら溜息を吐いた。

「力を持ったその時から何時しか自分も破壊者となるものを……こいつ等は理解しているのか？ 有事の際はこいつ等が真っ先に戦場へ行かなければならないと言うのに……」

俺は指揮官として見た場合、こんな兵力としては最高だろうが融通の利かない兵器に意味があるのかと言う事に対し疑問に思った。

しかし、一番の疑問は篠ノ之 束に尽きる。

「何がしたいんだ？ 彼女は……」

唯、世界を悪戯に混乱させた挙句、自分は雲隠れ。

「利と害がのつりあいが取れてないぞ……」

もういい加減そんな事を考えていると時間になった。

「さて、入学式に行くか……」

俺はすっかり重たくなった腰を椅子から離すとIS学園へと向かうのだった。

恙無く入学式が終了し、1年1組の教室に俺が入ると皆の視線が俺を突き刺した。

正直、コレはキツイ。

（まるで珍獣扱いだ……）

俺はそんな事を考えながら自分の名札がある席に座る。

サ行の席だからまあ、真ん中ら付近だ。

俺の近くにもう一人の男でISが操縦出来る織斑 一夏がいた。

（彼か……織斑先生の弟で俺より先にISを動かした男と言うのは……）

俺がそんな事を考えていると山田 真耶先生が教室に入ってきた。

山田先生のたどたどしい挨拶も終わり自己紹介が順当に進んでいく。

しかし、織斑 一夏はボウとしていたのか山田先生の呼びかけに気付き、名前を名乗った。

しかし、名前だけしか言わず暫くの沈黙の後、

「以上です!!」

には流石に俺も呆れた。

（他に言う事があるだろうに……）

その時、織斑先生が織斑 一夏を叩き倒し、自分の自己紹介を開始した。

黄色い悲鳴で揺れる教室。

そして、また自己紹介が再開される。

そして、俺の順番が巡ってきた。

女子の視線が一段と強烈に俺を突き刺した。

「皆さん初めまして。自分の名前はアスラン・ザラといいます。皆さんとは2年違いの18歳ですが、どうか気にせずフランクに話していただければ幸いです。趣味は機械工学とドライブで今もっている車はアルファアルファロメオのGTでカラーリングは赤です。好きな色は赤色で得意なスポーツはドイツ流西洋剣術が得意です。1年間、よろしくお願いします」

その自己紹介の後に一瞬の静寂。

そして、

『きゃ ああああああああ~~~~~
~~~~~ カッコいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!』

「ザラ様と呼ばせてください!!」

「きゃ~~~~~マジクール」

「ナビシートは是非私が!!」

「お兄様と呼ばせて下さい!!」

「デートしてください是非!!」

「今、フリーですか!?!」

「大人の色気がマジパネ!!」

「ザラ様! マジ抱いて!! 私の処女を奪って!!」

「濡れた……」

「アスラン様……ハアハア……」

色々と突っ込みたい。

特に最後の方!!

君達の将来が凄く心配だ!!

何とか織斑先生の怒声で事態の收拾を見たが休み時間が地獄だった。

廊下側の窓際には他のクラスや2、3年生の姿があった。

聞き耳を立てると、

「マジかつこいい〜！！ しかも私達より年上だし」

「あの子もなんか年下で良いわね……」

「織斑君のかつこいいけどザラ君のかつこいいわね……」

（正直、視線が辛い……）

俺がそんな事考えていると織斑 一夏が俺に声をかけてきた。

「あの、初めまして、俺、織斑 一夏って言います」

その自己紹介に俺は嘗ての後輩でシン・アスカの面影をその少年に見た。

（懐かしい感覚だ）

そんな感傷を無理やり脇へ追い遣り、改めて自己紹介をした。

「そんな堅苦しくならなくていい。俺の事はアスランでいいし、敬語もいいよ。改めて、アスラン・ザラだ。よろしく」

そう言いながら俺は織斑　一夏に握手を求めた。

「それじゃあ、俺のことは一夏、改めて宜しくアスラン」

そう言い頭をかきながら握手を返す一夏。

その様子に周りの女子が色めき立つ。

「いい！！　いいわ！！　男同士の友情！！　凄く絵になるわ！！」

「ガチBLEキタコレ！！」

「シャメで保存ですね。わかります」

「ぐへへへ……」

「ザラ様が攻めよね！？」

「織斑君も捨てがたいわ！！」

俺は思わずこう思った。

（俺は……間違ったのかな……この学園に入る事を選択した事を…  
…）

と。

「何か……いずらいな……」

一夏のその台詞に俺は万感の想いの丈を込めてこう言った。

「ああ」

と。

その後、篠ノ之 箒が現れ、一夏を借りて何処かに行ってから、この801空間と言つか乙女空間に晒される破目になった。

休み時間も終わり、授業を開始する。

山田先生が教団に立ち教鞭をとる姿は正に教師の姿だ。

俺はその姿にヤツパリ教師なんだなと失礼なことを思いながらデエスク備え付けのタッチスクリーン型画面に筆記していく。

「とまあ、ISに関する説明はここまでです。この時点で何か質問はありますか？」

その質問に誰も挙手しなかった為に山田先生は暫く生徒を見回した後、一夏を当てた。

「んーそれじゃあ、織斑君、何か質問はありますか？」

その問いかけに一夏は脂汗を掻き始める。

「えっと……あの……その……」

「？ 何ですか？ 織斑君？」

観念したのか一夏は蚊の羽音並みに小さな声で答えた。

「全体的に解りません……」

「へ？」

もう一夏はヤケクソ気味に言う。

「全体的に解らないんです」

ソレを聞いた山田先生は唸るような声を上げた。

「ぜ、全部……ですか……」

「はい……全部です……」

その言葉に織斑先生が一夏に語りかける。

「織斑、お前、入学前に読むテキストを読んでいないのか？」

その質問に一夏は思い出したように答えた。

「ああ、あの分厚い教本？ 読まずに捨てたけど？」

その言葉を聞いた瞬間、織斑先生は強烈な拳骨の一撃を一夏の頭に

見舞った。

アレは痛いぞ。

音からして痛い。

「イツ!？」

「馬鹿者! あれに必読と書かれていただろうが。まったく……ザラ、この馬鹿にISについての基本を教えてやれ」

俺は織斑先生の指示に従い暗証した事を言う。

「ハイ、IS『インフィニット・ストラトス』は宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォームスーツです。ISを形成するパーツは核となるコアと腕や脚などの部分的な装甲であるISAーマーから形成されています。また、その攻撃力、防御力、機動力は非常に高いが故に『究極の機動兵器』と呼ばれています。特に防御機能は突出して優れており、シールドエネルギーによるバリアーや『絶対防御』などによってあらゆる攻撃に対処でき、操縦者が生命の危機にさらされることは殆どありません。また、ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出すことができ、さらに、ハイパーセンサーの採用によって、コンピューターよりも早く思考と判断ができ実行へと移せます」

俺の説明に感心したように頷く山田先生と対照的に当然だと頷く織斑先生。

「その通りだ。織斑、コレくらいは教本を暗記していれば誰でも理解できる内容だ。後でテキストは再発行してもらえ」

三時間目が終了し、俺は一夏にノートを貸してやり説明をしながら教えていく。

「とまあ、こんな所だ。コレが基本だからここさえ抑えておけば応用が利く」

その説明に一夏は頷きながら俺にお礼を言った。

「サンキュなアスラン。正直、俺一人なら途方に暮れていたぜ」

そんな時だった、金髪を優雅に靡かせながら一人の少女が俺達に語りかけてきた。

「そこの二人、よろしくて？」

それもかなり高圧的な態度で。

「ん？」

「は？」

その俺達の返事が御気に召さないのか少女は何と無礼なと言わんばかりに俺達に言い放った。

「まあ！？ 何ですの、そのお返事！？ 私に話しかけられるだけ

でも光栄なのですからそれ相応の態度と言うものがあるのではないのかしら？」

悪いが、俺は君みたいな礼儀を守らない子供に礼儀を尽くす謂れは無いのだよ。

一夏は少女を見ながらこう言った。

「悪いな……俺、君の事知らないし……アスラン知ってるか？」

「いいや、知らないな……」

俺達の回答に信じられないと言わんばかりに彼女は俺達を捲くし立てた。

「まあ！？ 私を知らないのですの！？ イギリス代表候補生、セシリア・オルコットを！？」

知らない者は知らないし、一々、高々代表候補生の名を知る必要など無い。

しばらく一夏は熟考した後、セシリアに問いかけた。

「なあ、一つ質問いいか？」

「ハン、下々の者の要求に答えるのは貴族の務めですわ。よろしくてよ」

オルコットは優雅な振る舞いで一夏の質問に答えようとする。

「代表候補生って……何？」

その瞬間、聞き耳を立てていた周囲の女子は盛大にすっ転び、セシリアは転びそうな状態を自前の優雅さで押しとどめた。

しかし、器用な女だ。

俺は右手をやりながらヤレヤレと言いたげに頭を左右に振った。

仕方ない、爆発しそうだから一夏に教えるか。

「代表候補生はな、各国のIS操縦者の候補生として選出される奴等で、国家やスポンサーたる企業から専用ISを与えられる。その国の代表選抜に参加することができる者達の事だ。当然、ISはコアが限られているからその席も少ないその狭き門を通りぬけた奴等だ」

その説明にセシリアは目を光らせ誇らしく語る。

「そう！！ 限られた、一握りのエリートですわ！！」

だが、所詮は候補であって代表ではない。

さらに代表とは1人、本当に狭い門を潜り抜けた1人になる権利がある。

高が代表候補生で其処まで自分を喧伝できるオルコットの厚顔さに俺は呆れた。

少なくとも山田先生は自身が凄腕の代表候補生であつたにも関わら

ず“所詮”と切り捨てている。

だからこそ俺はそんな謙虚な山田先生を人として尊敬できる。

織斑先生も自身がISの世界大会、モンド・グロッソで総合優勝を飾り、『ブリュンヒルデ』と呼ばれているのにソレを誇る気は更々無い。

本当の優れた人は自分の栄光や経歴を声高には叫ばない。

行動で示しているからこそ、彼女達を俺は尊敬できる。

俺はオーブの准将だが其処まで自身の肩書きに興味は無い。

あくまで行動と結果が全てであってソレが国や世界を平和にすると言う信念があったから戦えた。

俺はオルコットが立ち去るまでそんな事を考えていた。

### 第3話 アスラン決闘を申し込まれる

H R の時間、クラス対抗戦のクラス代表を決める事になった。

「先生、代表は織斑君がいいと思います！」

一人の女子の発言に他の女子も同意した。

「い！？ 何で俺！？」

一夏が慌ててそう言うが周りの雰囲気が一夏が代表でいいだろうと言う雰囲気になっていた。

ふむ、面倒事から解放される。

俺がそんな事を考えた矢先、一夏が俺を巻き込んだ。

「せ、先生！！ 俺はアスランを推薦します！！」

一夏！！ 俺を巻き込むな！！

周りのクラスメイトもソレでありかもといった雰囲気になりつつあった。

そんな時だった。

オルコットが声高に叫んだ。

「その様な選出は認められませんわ！　男がクラス代表なんていい恥曝しですわ」

恥曝しときたか。

其処まで言うか普通？

お前には常識と配慮が足りないみたいだ。

それでもまだオルコットの言葉は止まらない。

「この様な屈辱をこのセシリア・オルコットに1年間味わえとおっしゃるのですか！？　大体、文化としても後進的な国で過ごさなければならぬ事事態、耐えられない苦痛ですわ！！」

その言葉に流石の俺もつい口が滑った。

「ほう？　ではその文化としても後進国からI S コアを恵んで貰っているのは何処のどの国かな？」

その言葉にオルコットの口が金魚みたいにパクパクと動いた。

その顔は怒りに満ち溢れている。

「イギリスが先進国なら今の発言が文化的で優雅な発言とでも？　フツ、なら俺はそんな人や国を罵倒する文化など興味も魅力も感じんな。没落しても無駄にデカイプライドを持ち続ける。だからジョンブルは衰退した。そんな過去の黴臭い栄光にしがみ付くくらいな

らいつその後進国で俺は十分だ」

その言葉に我慢なら無いばかりにオルコットはキレた。

「あ、あ、あ、貴方！！ 私と私の祖国を侮辱しますの！？」

「フツ、自分の発言は棚に上げてその言い草。笑わせる。もし人の悪口を言うならば自分に帰ってくる事を予期しろ。まさか、自分が一方的に言えると思ったか？ 悪いが俺は自分の友が馬鹿にされているのを黙って見ているほど優しくはないぞ」

オルコットはどうやら我慢の限界だったらしく怒り狂いながら人差し指を突き出し、俺に宣戦布告してきた。

「け、決闘ですわ！！」

俺はその言葉に自分の中に抑えていた感覚が解き放たれるのを感じた。

“ソレ”が目を覚ました。

“戦士としての自分”が。

セシリアはアスランの沈黙を見て怖気づいたと思った。

（フン、所詮、男などこの程度ですわ）

セシリアは生前の父親を思い出した。

母親にオベツカを使い卑屈に振舞う父親。

女尊男卑が明確になった時など更に卑屈になった。

目の前の男も同じように卑屈になった。

そう思っていた。

しかし、ソレはセシリアの勘違いだった。

「ほう？　ならば、討たれる覚悟は出来てるんだろうな？　セシリ  
ア・オルコット？」

アスランがそう口にした瞬間、世界が変わった。

比喻でも例えでも無い。アスランを中心に世界が変わった。

心臓を直接鷲掴みにされた様な感覚。

背中には今まで流したことの無い量の冷や汗。

肌は鳥肌がたち。

唇は震えが止まらない。

そのくせ体は動かないのだ。

セシリアは周りを見たとき殆どの生徒が震えながら泣きそうな顔をしていた。

中には呼吸困難なほど荒い息をして泣いている生徒までいた。

あの幕ですら震えを必死で押しとどめて耐えていた。

一夏は椅子にへたり込む。

真耶は半泣きになりながら震えていた。

千冬はその額に冷や汗を薄っすらと流した。

（誰ですの！？ “アレ”は！？）

今まで温厚だが嫌見たらしい男と思っていたアスランがセシリアには化け物に映った。

そして、セシリアの本能が告げる。

“アレ”と戦うな！

“アレ”の前ではお前は無力そのものだ！

“アレ”から今すぐ逃げろ！

“アレ”はお前にとって死そのものだ！

しかし、セシリアは自身のプライドがその本能をねじ伏せた。

（お、男に、私が男に圧倒された！？ このセシリア・オルコット

が！？ ふざけないで！！ 私は代表候補生ですよ！？ ソレを  
この様な男に圧倒されたなんて！？）

セシリアはその屈辱を怒りに変えてアスランに言い放った。

「じよ、上等ですわ！！ この私が貴方を倒してさしあげますわ！  
！」

そこですかさず千冬が命令した。

「オルコットとザラが戦いその後勝った者が一夏と戦う。ソレで異  
存は無いな」

その言葉にアスランは放っていた何かをその内に押し込め、元のア  
スランに戻った。

「解りました」

「解りましたわ！！」

それに何とか気を取り直したセシリアが今までの恐怖をかき消す様  
に了解の声を上げた。

やれやれ、コレだけ脅しても立ち向かうか？

俺も大人げ無かったしクラスの奴等には申し訳ない事をしたな。

しかし、この世界のIS乗りはプライドが高過ぎるぞ。

俺は席に静かに座ると溜息をソット落とした。

## 第4話 アスラン決闘に臨む

俺はオルコットから決闘を申し込まれ早一週間が経過した。

その間、一夏のISがまだ到着しないとかでその長さになってしまった。

俺はその間取り敢えずISの訓練と肉体鍛錬を行った。

一夏は篠ノ之に剣道で叩きのめされていた。

一夏、骨は拾ってやるからな。

さて、俺と一夏と筈はアリーナの管制室横にある操縦者待機室に俺と一夏はISスーツを着た状態で座っていた。

『ザラ君、オルコットさんのISはブルーティアーズ、第三世代型ISで両肩のビット型射撃兵装ブルーティアーズに大型特殊レーザーライフルスターライトmk?に高周波振動ナイフインターセプターです。解りましたか?』

山田先生の言葉に俺は無言で頷いた。

『ザラ、お前とお前のISが本気を出せばオルコットを殺しかねない。そこで今回、お前のISに追加のリミッターを設ける。リミッターの内容は全ビーム兵装の出力50パーセントカット、装甲強度の50パーセントカット、PIC起動出力50パーセントカット、

更にセンサー有効範囲と感知能力の50パーセントカットだ。問題は？」

その内容に俺ではなく一夏と篠ノ之が納得できないと言わんばかりに詰め寄った。

「千冬姉！？ 幾ら何でもソレはやり過ぎだ！！」

「そうです！！ ザラに装備劣化した得物を持たせて両手両足縛り上げて重りまでして目隠しして戦場に出ると！？ 対等ではありません！！」

その言葉に千冬は憮然として答えた。

『学校では織斑先生だ！ 馬鹿者！ 正直、それでも手加減になるかどうか解らん。更にハンディをつけたいくらいだ。悪いが織斑、篠ノ之。ザラは下手したら学年最強どころか学園最強だろう。多分、そんな男に今のオルコットが挑んでも秒殺だ』

その言葉に一夏と篠ノ之が俺をマジマジと見た。

『ソレとザラ、決して殺すな。人死にはゴメンだ。殺しそうになったら止めに入る。いいな？』

俺は織斑先生の言葉に無言で頷いた。

さて、ジョンブルのお嬢様が首を長くしてお待ちかねだ。

俺は右手を掲げる。

その瞬間、右手中指の赤い指輪が赤い輝きを放つ。

そして、俺の周囲から光が晴れた瞬間、其処にはインフィニットジャスティスを装備した俺がいた。

それを見た一夏と篠ノ之は驚きの声を上げた。

「か、かつこいい……何か騎士みたいだ……」

「ふ、全身装甲！？　しかし、P I Cが背中に一体化しているISなど聞いたことも見たことも無い。それに色が灰色？　塗装がされていないのか？」

俺は一夏の驚きを背に俺はジャスティスを歩かせる。

「見せてもらおうか……イギリス代表候補生の実力とやらを……」

俺はそんな事言いながらカタパルトのロックを思考制御でロックした。

俺はP I Cの出力を最大にする。

ジャスティスはそれに答えるが如くファトウム01のスラストノズルが輝きを増す。

『進路クリアー、ザラ君、発進どうぞ！！』

その言葉に俺は前を見据える。

「アスラン・ザラ！　ジャスティス出る！！」

俺はオルコットが待つ戦場へと飛び立った。

セシリアはアスランが来るのを待っていた。

眼窩にアスラン側のピットを見つめながら待つこと数分。

発進許可の青ランプが点灯する。

「来ましたわね……」

オルコットは自分に屈辱を与えた男をどう処断すべきかを考える。

しかし、彼女の思考は真っ白になった。

突如、灰色の全身装甲が速度で飛び立ったかと思えば、灰色は美しいローズピンクに近い赤に染まった。間接部は太陽に反射し白銀に光り輝く。

後ろのPIICを広げたその姿は騎士がマントを棚引かせてる印象すら受ける。

赤い鎧を纏った騎士。

観客はそう思った。

「う、美しい……」

セシリアは我知らずそう呟いた。

一夏と筈はその様子を見ていて啞然とした。

「い、色が変わった……」

「何なのだ……あのISは……」

そう、コレこそが、アスラン・ザラが乗機にしてC・E・接近戦最強の機体。

インフィニットジャスティス。

今、異世界にISとして再誕した。

「な、何ですの！？ そのISは！？」

セシリアが金切り声でその機体の名を問い出さした。

アスランは静かに、噛み締める様にその名を言い放った。

「インフィニットジャスティス」

「無限の……正義……」

セシリアはつわ言の様にその和訳を口にした。

俺は左腰のビームサーベルを引き抜き、右腰にあるビームサーベルの柄頭と握っているビームサーベルの柄頭を連結させソレを引き抜く。

その瞬間、桃色の超高熱の刃が左右のビームサーベルの先端から吐き出された。

そして、左腕に持たせた盾を正面にすると同時にビームサーベルを腰溜めにする。

そう、俺がアンビデクストラス・ハルバードで構える得意な構えだ。

オルコットもライフルを構える。

その時だった。

突如のロックオン警告。

刹那、俺は体を左に少しスライドし頭を左に傾ける。

「開始の戦鐘も鳴っていないのに発砲か？ 余裕も優雅さも無いな…  
…戦場ではないんだぞ？ 少しは礼儀を守れ、オルコット」

俺のその言葉にオルコットは微笑みながらこう言った。

「あら、挨拶ですね。挨拶。中々良い挨拶だったでしょ？」

不意打ちが挨拶とは、戦場では確かに儀礼的な物を持ちこまない。  
試合と戦場は違う。確かにセシリアはワザトロックオンをして馬鹿  
丁寧ユツクリ狙いを定めて撃った。  
俺の実力を測るためか。

味なマネを。

まさか3歳も年下に試されるとは。

『オルコットさん、競技は開始されていません。ペナルティーとし  
てシールドエネルギーを射撃分引いておきます』

「自由……」

山田先生のペナルティー宣告にも優雅に答えたか。

余裕か？

だが、ソレが戦場では命取りと教えてやる。

『それでは、アスラン・ザラ対セシリア・オルコットの試合を行  
います』

俺は改めてビームサーベルを構え直す。

セシリアもライフルを構える。

『始め!!』

山田先生の声と同時に俺達は動き出した。

先手はオルコットだ。

光学兵器、粒子の尾を引いていなかった事からレーザーだろう。

ブリッツと比べるのもおこがましい程の低出力レーザーだ。

話にならない。

ジャステイスのVPS装甲が100パーセントの出力なら簡単に防げる火力だ。

50パーセントでも精々装甲表面に黒い焦げ目が付くくらいだ。

たいしたダメージにすらならない。

が、

このまま勝つても機体性能が良かったから勝てたと言われそうだ。

仕方ない。

圧倒的で言い訳が許されない程の勝ち方で勝つか。インバクト

そう思いながら俺はキラが飛んできたビームをビームサーベルで切り払っていた事を思い出す。

（フ、ソレもまた面白い）

そう考えた俺は飛んできたビームを回避するのを止めて相手の銃口、

目線、腕や肩の筋肉の動きを備に観察しながらビームサーベルを振るう。

その瞬間、レーザーは弾き返され地面に激突した。

私ことセシリア・オルコットは今、とんでもない物を見た。

スターライトmk？から放たれるレーザー弾を事もあろうにあの男は光る剣で叩き落としたのだ。

（じよ、冗談ではありませんわ！？ そんな事ある訳！！）

そう考えながら今度は頭部に狙いを定めて発砲した。

しかし、あの方は、光る刃を巧みに操りレーザーの起動を反らして見せました。

（何て化け物ですよ！？ 私の射撃をいとも容易く！！）

つまりは光と同じ速度で飛んで行くレーザーをあの手はいとも容易く反応するという事。

人知を超えた剣技ですわ。

私は覚悟を決めると同時に自分がアスラン・ザラを舐めていた事を

この場で詫びますわ。

俺はオルコットの気配が変わった事を感じ取った。

フン、やる気かいだろう。

俺は一旦オルコットから距離を取った。

「貴方が初めてですわ。ここまで私を追い込んだのは……」

その言葉と共にセシリアはライフルの銃口を俺から反らした。

「だから……貴方に敬意を払い……」

次の瞬間、浮遊している左右のパーツから2本ずつの計4本の何かが高速で動き出す。

「本気を出させていただきますわ!!」

そして、ソレは俺の周りを高速に不規則に飛び回る。

成る程、ドラグーンいやビットか。

俺はそのビットのオールレンジ攻撃を全て回避してみせる。

正直、眠くなるオールレンジ攻撃だ。

フラガ少佐、いや今はフラガ大将か、やキラやレイと比べたら余りに単調で鈍重で効果的でないビット運びだ。

正直、あの3人のドラグーンの運びはレベルは未来予知のレベルに近い回避するのも一苦労だ。

しかもセシリアみたいに棒立ちではない。ちゃんと此方の攻撃を回避しつつ本体も攻撃をするのだ。

それに比べると甘すぎる。

「当たらなければどうと言う事は無い」

俺はビームサーベルでビットを一つ切り払う。

切断と同時にビットに背を向け次のビットを破壊。

背中と同時に2つの爆発が響く。

「二つ!」

そして、俺の近くを通るビットを切り払う。

「三つ!」

そして、最後は頭部、胸部バルカンで撃破する。

「四つ!」 終了

そう言いながら俺はオルコットに向かう。

後はコイツだけ。

しかし、オルコットは自分の切り札を落とされたのに微笑んでいた。  
まだ切り札を隠しているらしい。

「残念でしたわね？ ブルーティアーズは後2機あってよ！！」

そう言うところコットの腰から砲身がせり上がる。

そして、放たれる。

しかし、俺はソレをバレルロールしながら連結していたビームサベルを引き抜き二刀流にして擦れ違い様に切り裂いた。

そして、オルコットのわき腹を横薙ぎにする。

緊急に絶対防御が展開されるがソレすらひび割れる。

そして、1秒後、ブザーが鳴り響く。

『セシリア・オルコットのシールドエネルギーエンプティーにより  
勝者、アスラン・ザラー！！』

フム、1分かまあ、時間が掛かったが許容範囲内。

俺はそう思いながらセシリアに手を差し出す。

「オルコット、大丈夫か？」

俺の問い掛けにオルコットは力なく頷いた。

そして、意を決した表情で俺に問いかける。

「なぜ腰のライフルを使いませんでしたの？　そうすれば攻撃のバリエーションにも幅ききますのに？」

その質問に俺はこう答えた。

「ソレも考えたがやはり俺の得意分野で戦わないとお前も納得しないだろ？　だからさ」

その回答にセシリアは目を大きく見開く。

「その為に戦略の幅を狭めたと！？」

「ああ」

その言葉にオルコットは笑った。

悲しくも可笑しそうに笑った。

俺はオルコットが心配になって声をかける。

「オルコット？」

「セシリア」

「へ？」

「セシリアで結構ですわ。その代わり貴方の事をアスランと呼んでも宜しくて？」

俺はそう微笑みながら問いかけるセシリアに笑顔を向けながら言う。

「ああ」

何故かセシリアが頬を赤くしているが本当に大丈夫だろうか心配になつて俺の額を彼女の額に合わせる。

「ヒャン！？」

セシリアは可愛らしい悲鳴を上げる。

「フム、チョット熱いぞ？　大丈夫か？」

「だだだだだ大丈夫ですわ！！　どうしようもなく大丈夫ですわ」

言葉が怪しいがまあいい。

『コラ！！　貴様等何時まで其処にいるつもりだ！！　オルコット、貴様は失格だから外へ出る！！』

織斑先生の怒声で俺とセシリアの会話はここまでとなった。



## 第5話 アスラン女難の始まり

所変わって一夏と箒は如何したものかと考えていた。

一夏は半分絶望、半分諦めの表情がその目を支配していた。

「なあ、箒……俺、今からあんな化け物と戦うんだよな？」

その何とも頼りない表情に箒は激をとばした。

「戦う前から諦めて如何する！？」

しかし、次の一夏の言葉に流石の箒も押し黙る。

「じゃあ、俺がアスランに勝てる確率はあるのか？」

「それは……」

「だろ？ しかもアスランは射撃兵装があるんだぜ？」

「じゃあ、懷に飛び込めば！！」

その言葉に一夏は呆れながらも溜息を吐いて言う。

「たとえ潜り抜けられたとしても、あのレーザーすら弾き返す変態剣術の餌食だぜ？ さっき、オルコットに言ってただろ？ 得意な剣で戦ったって……それって接近戦はアスランの土俵だぜ？ 同じ

土俵で戦うとしたら物を言うのは技術と経験と力だ。俺とアスランじゃあそのどれもアスランには敵わねえ」

何時までもウジウジ悩む一夏に箒は怒鳴る。

「戦う前から戦いを放棄して如何する！？ 幾らザラが頭抜けていても相手は同じ人間なんだ！！ 確かに理論的にはお前の勝利は万に一つも無いかもしれない。でも、ソレを理由に戦いを放棄するなどお前らしくも無い！！ 思い出せ！ 一夏！ 私が虐められていた時、お前は数の暴力に屈したか！？ 私を見捨てたか！？ 違うだろ！！ お前は私を殴られながらも助けてくれた！！」

その言葉を聞いて一夏の瞳に力が宿る。

「私はそんなお前だから……！！」

途中まで言いかけた言葉を箒は飲み込んだ。

一夏の様子が変化した事に気が付いた。

「悪い……忘れてたぜ……箒……ハハ……確かに俺らしく無かったわな……何相手が強いくらいで諦めてんだ？ 情けねえ……こんな事じゃ千冬姉に申し訳ないぜ……腹は決まった。後はアスランの装甲に俺の刀を浴びせる！」

その言葉に千冬の名しか入っていなかった事に不服を感じながらも箒は一夏を自分が出る限りの笑顔で見送った。

「ああ、行って来い！ そして勝て！！」

「ああ!!」

2人とも馬鹿じゃない。2人とも勝てない事は先刻承知。ただ2人には敗北の悲壮感も強者への恐怖も無い。

あるのは前を向いて勝利を掴むと言う意思だけだった。

俺は腕組をしながらアリーナ中央に陣取っていた。

アリーナ観客席は喧騒の渦に包まれている。

しかし、一夏の奴、遅いな。

そう思った時だった。

一夏がピットから勢い良く飛び出してきた。

俺は一夏の瞳を見た時、内心驚いていた。

(ほう……勝負を諦めてはいない様だな……いい目だ)

ソレは腕組みを止め手を下ろすと、一夏に語りかけた。

「準備はいい様だな？」

一夏は俺をその強い眼差しで見据えながらはつきり言い放った。

「ああ、何時でもいいぜ!!」

そう言うで一夏は刀型のデバイスを取り出し、構える。

俺はリアスカートにマウントしていたビームライフルを取り構える。

『それでは、第二回戦！ アスラン・ザラ対織斑 一夏の試合を開始します』

お互いがお互いを見据える。

『始め!!』

その声と共に俺達は加速した。

千冬と真耶はこの試合をモニタリングする為にモニターを中止していた」

そう、この試合は日本政府とI.S.委員会の求める試合だった。

「それにしても相変わらず射撃も上手いですね、ザラ君は……」

その言葉に千冬も頷いた。

「ええ、その射撃能力だけを見ても世界トップクラスの射撃能力でしょう。オルコットの様に棒立ちの射撃とは訳が違う。超高速で動き回りながらも牽制射撃ですら確実に当ててくる。アレをシールドエネルギーを消費せずかわすのは困難に近い」

千冬は知らない事だがソレをかわして尚且つ反撃出来る存在はいる。無論、ソレはC・E・での世界の話だが。

「織斑君……勝てるでしょうか……？」

真耶のその言葉に千冬はスッパリと切り捨てた。

「今の所は那由他の彼方でしょう」

一夏は10の60乗すら超える確立で敗北する。

千冬はそう言ったのだ。

「幾らなんでもそれは……」

ありえない。

そう言いかけて真耶は口をつぐんだ。

解っているのだ。

アスランはどんなに格下でも油断しないし手も抜かない。

圧倒的な力でねじ伏せる。

確かにセシリアには射撃兵装は殆ど使わなかった。

しかし、ソレはセシリアに圧倒的敗北と自身の力を理解させる為と言う勝利条件を満たす為だろう事は真耶も理解している。

つまり、一夏にはそんな制約が無い。ならば射撃兵装もふんだんに使う事だろう。

「しかし、織斑の目は死んでいない。あるいは一太刀浴びせられるかも知れません」

真耶はその千冬の言葉を聞きながらモニターを見つめた。

一夏は焦っていた。

（クソ！！ 解っていたけど。隙が全然無いばかりか射撃が鬼の様な弾幕と正確無比な射撃だぜ！！）

しかし、次のアスランの台詞で心が折れそうになった。

「一夏！！ こんな手緩い牽制射撃すら避けられないのか！？」

（これで手緩いのかよ！？）

一夏は回避するが確実に回避先に先回りしたようにビームの嵐が吹き荒れる。

「馬鹿野郎！！ 回避は最小限で相手の目線と銃口、肩の動きを見て即決で回避しろ！！」

「そんな超人的な事出来るか！！」

一夏はそう叫びながらも突撃を開始するが。

やはりアスランの射撃が待っていた。

「馬鹿野郎！！ 猪突すれば何とかなると思っただか！？ 相手との距離を詰める場合はジグザグに動きながらかく乱しつつ高速で近付け！！ ソレか相手の認識外の速度で動け！！」

アスランの怒号はアリーナ内に響く。

その時だった。

突如白式は輝きを放つ。

「ファーストシフトか……いいだろう、次の段階に移る」

アスランはそう言いながらビームライフルをリアスカートにマウントしビームサーベルを引き抜いた。

さて、俺の教えを何処まで一夏が学習して行動に移せるかだな。

そう思いながらアスランは一夏を待った。

一夏の持っていた刀型デバイスが突如割れて青白い光の刃を形成した。

そして、俺と一夏は打ち合う。

鏢迫り合いをする俺達。

どうやらこの世界でも鏢迫り合いは可能らしい事に俺はホットした。

俺達の世界のビームサーベルはミラージュコロイドの応用でビームの刃を形成している。

その為、C・Eのビームサーベル同士がぶつくと双方の磁場が干渉し合って刃が維持できなくなる。

しかし、干渉が途切れると即座に刃が形成される。それ故に刃を干渉させたまま、斬りつけるのに有利なポジションの取り合いの為、お互い距離を取ったり、クルクル回りながら有利なポジション取りをしている。

それ故に、ビームサーベルで斬り結んでる時の機動は独特だ。『相手が振ったビームサーベルの延長線上から常に機体を外す』コレが基本的な動きとなる。

と、されていたが、戦闘データを見る限りでは最初にC・Eでビームサーベルの鏢迫り合いを演じたデュエルとストライクにはそんな現象は起きなかった。

更に、俺が乗っていたイージスとキラのストライクの対艦刀でも切り結ぶことが出来た。

更に言うならプロビデンスとストライクでもビームサーベル同士で切り結ぶ場面が何度もあった。

更にインフィニットジャスティスのグリフォンビームブレードでシオンが投げたブーメランも蹴り弾いたことからこの仮説は覆された。

俺は興味本位でビームサーベルとビームサーベル同士を切り結ばせてみた。

切り結べた時間は大体1分位だった。

その後、ビーム同士の磁場が干渉し合いすり抜けた。

つまり、1分以内なら切り結ぶ事が可能である。

しかし、1分も切り結ぶ事など実戦ではあり得ない事からもコレは許容範囲内であろう。

余談は兎も角、俺達が切り結ぶ刃と刃がスパークして放電している。

桃色の刃は衰えを知らず強い力を放っている。

一方、白式の方は何だか光が弱々しくなっている。

その時、白式のブレードが消えた。

「へ？」

一夏は啞然としながら自分の剣を見つめる。

俺は剣を引き、一旦一夏から離れた。

そして、ブザーが鳴り響き、山田先生が終了を告げた。

『織斑君のシールドエネルギーエンプティーにより勝者、ザラ君！』

何とも後味の悪い終わり方である。

その後、一夏と箒と一緒に織斑先生から聞いた話では一夏の剣は『雪片式型』といい更に一夏は何時の間にやらワンオフアビリティーを発動していた。

その名も『零落白夜』と言うそうだ。

こいつが発動すればエネルギー性質のものであればそれが何であれ無効化、消滅させる白式最大の攻撃能力。しかしその発動には自身のシールドエネルギー、つまり自分のライフを削るという武器仕様であり、諸刃の剣でもある。その威力は全ISの中でもトップクラスだそうだが、俺のビームサーベルには効果が無かった。

その理由を一夏は織斑先生に質問した。

その回答が、

「ザラのインフィニットジャスティスは一時間に全世界のISのシールドエネルギーをフルに出来るほどの出力を生み出すエンジン、

『ハイパーデュートリオンエンジン』が搭載されている。更に兵装は100パーセントなら零落白夜が消滅させるどころか逆に鏖迫り合えば1秒でパンクするほどの容量だ。打ち合っただけでシールドエネルギーが空になる。正に零落白夜の天敵だ」

ソレを聞いた瞬間、一夏と箒は啞然とする。

ソレを見ながら織斑先生は溜息を吐いた。

「解つただろ？ コレだけリミッターを掛ける理由が……更にザラの技量と相まって倒せる奴がこの学園からいなくなる。アレだけリミッターを掛けても絶対防御がひび割れるほどの出力だぞ。100パーセントなら絶対防御がガラス細工だ」

それを聞いた瞬間、一夏と箒は俺のリミッターは甘いとすら考える顔を俺に向けた。

「と言う訳でザラ。ジャステイスのリミッターを更に掛ける。いいな？」

（お願いじゃなく命令ですよ。それ）

俺は心の中でしか突っ込む事が出来なかった。

その夜、1年1組が食堂を貸し切り、パーティーを開いていた。

「と、言う訳で代表は織斑　一夏君に決定しました！！」

その言葉に一夏は啞然とした。

「ちょちょヨット待て！！　何で俺！？　大体、代表決定戦はアスランの圧勝だっただろ！？」

何だ、その事か。

俺はニヤニヤしながら一夏にこう言った。

「ああ、それはな、織斑先生が俺が出たら圧勝してバランスが悪すぎるからここは間を取ってお前になった訳だ」

その言葉に一夏は慌てる。

「ならオルコットが！？」

その言葉にセシリアがこう言った。

「私は辞退させていただきますわ。何せ、私は敗れた身、アスランさんの指示に従いますわ」

そう言いながらセシリアは俺を見ながら何故か頬を赤らめる。

何でだろ？

「兎に角、一夏さん、頑張ってくださいまし。私とアスランさんの代わりに出るのです。恥はかせないで下さいね？」

その言葉に一夏は戸惑う。

「一夏さん」？」

「ええ、友達をファーストネームで呼ぶのは当然ではなくて？ それと私の事はセシリアと及びくださいな」

そう言いながら優雅に振舞うセシリアに篠ノ之が噛み付いた。

「一夏の名を慣れなれしく呼ぶな！！」

しかし、セシリアは涼しい顔で篠ノ之の耳元でヒソヒソ話す。

その内容に納得したのかそれ以上は何も言わなかった。

何を話したんだ。一体？

「まあ、友なら仕方ない。友なら」

「そうですね。おほほほほ」

そうしている内にカメラを持った二年のネクタイをした女子が突然声を掛けてきた。

「ハ―イ新聞部の黛 薫子です。取材に来ました！」

新聞部？ 何故？

「おお！ 噂通り男子がいるね。しかも二人とも美形で結構結構」

俺と一夏を品定めするように取材を開始する女性。

「それじゃあ、代表になった織斑君から一言!!」

一夏はその強引さにシドロモドロになりながら答える。

「え、あ、その、頑張ります」

その内容に不服だったのか黨先輩は後で捏造する旨を一夏に告げる。

中々のイエロージャーナルである。

「それじゃ、1年最強の呼び声高く、IS学園の赤い騎士のあだ名を持つザラ君から」

そのゴテゴテした某二臭いあだ名は何だ？

俺の質問に黨先輩がこう答えた。

「今回の試合を見た生徒が映像を学内に配信してソレを見た生徒達がそう呼んだんだよ」

と。

兎に角、俺は取材に答える事にした。

「俺は一夏のサポートとして、一夏が勝利出来るよう全力で挑みたいと思います」

そう言つと、黨先輩は詰まらなそうに模範的な回答でパンチがないと言われた。

そして最後にセシリアに振られたが話が長い事から適当に書いておくそうだ。

セシリアは黨に近付き耳元で語る。

「写真撮影は最初は私とアスランさんのツーショットでお願いいたしますわ。ソレと写真は現像して私に下さい」

「OK、OK。取材に協力してくれたしソレくらいお安い御用だよ」

セシリアはその返答を聞き、こつそりガッツポーズをとる。

（よし！！ ですね。アスランさんと私のツーショット写真が私の物に！！）

セシリアは浮かれてアスランの元まで歩み寄る。

「それじゃあ、ザラ君とオルコットさんから写真を撮るよ？」

アスランはそう言われ、仕方なくといった感じでレンズの前に立つ。

しかし、ここでアスランの予期せぬ行動をセシリアは取り出す。

行き成り、セシリアはアスランの腕に組み付き、その胸元をアスランの二の腕に押し当てた。

「セ、セシリア!？」

「あら、如何しましたの？ アスランさん？」

慌てるアスランを見ながらセシリアは瞳を潤ませながら頬を赤らめる。

その唇はリップが薄く塗られ、水をたたえた様な潤いを見せる。

アスランは二の腕の感触とセシリアの顔に不覚にもときめいた。

（不味い!! コレは凄く不味い!! 俺の二の腕にセシリアの柔らかいものが!!）

アスランは意を決してセシリアにお願いした。

「あのな、セシリア、その、当たっているんだが……少し離れてくれないか……？」

その懇願にセシリアは頬を更に赤らめ意地悪な微笑を湛えながら言う。

「あら、当たっているわけではありませんわ、当てていますのよ？」

（駄目だ!! 何か知らんがセシリアが可笑しくなった!!）

アスランの内心の葛藤を他所に黛はシャッターを切る事を宣言した。

しかし、やはりここはIS学園、セシリアの思惑は物の見事に破算となる。

一夏と箒を含む全員がチャッカリフレーム内に入っている。

「な、何でこうなるのです!？」

セシリアの叫びを聞きながらアスランはほっとした。

しかし、アスランは知らない、これから彼の苦悩は加速していくのだから。

ソレもカナリ悪い方向に。

頑張れアスラン。

アスランの女性問題に幸あれ。

## 第6話 アスラン訓練を始める。

俺事アスラン・ザラがこの世界に来て早4ヶ月。

IS学園生徒としてこの学園に通っている。

今思えば、オーブ国防軍参謀本部の准将から一気に一学生である。

何と言うクラスチェンジだろうか。

その代わり、重い責任と義務から解放された代わりに学生の義務と責任になったただけだ。

早い話が、学業だ。

俺はその学業であるISの実習の講義を受けている。

織斑先生は一組の生徒の前でISの基本操作の説明を開始した。

「では、これより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、ザラ、試しに飛んでみる」

その言葉に俺とセシリアは素早く答えた。

「解りましたわ！」

「ハッ！」

その瞬間、オルコットは瞳を閉じて念じる様にブルーティアーズを起動した。

「え、あれ？」

一夏は起動することが出来ず戸惑う。

「早くしろ、熟練したIS操縦者なら展開まで1秒と掛からないぞ」

織斑先生も容赦が無い。

そう思いながら一夏は何とかISを展開する事が出来た。

次は俺の番か。

俺は瞳を閉じる事無くノーアクションで起動した。

ジャスティスを形作る頭、胴体、手足、シールド、ビームライフルが0・1秒で形成された。

その瞬間、辺りがざわつく。

「アレが、ザラ君のIS」

「フルスキン？ でもあんなIS見たこと無いよ」

「でも、動画で見たときの色と違うね」

OS起動はスキップした。

コイツが核エンジンで動いている事がばれたら大事だ。

周りの喧騒を他所にVPS装甲を展開した。

メタリックグレーからローズピンクに近い赤に装甲が染め上げられる。

「色が変わった!？」

「綺麗〜」

何故かセシリアが頬を赤らめながら俺を見つめる。

何でだ？

「よし、飛べ!!」

その瞬間、俺はこう言いながら飛んだ。

「アスラン・ザラ、ジャステイス、出る」

俺は脚を少し折り曲げ、脚力を利用して飛翔した。

地上での発進の基本技術だ。

一タスラスターを全開にして棒立ちで飛んではスラスターが持たない。

俺は、上空500メートルの地点で静止した。

ソレを見ていたセシリアは啞然とした。

アスランは500メートル上昇、急速停止、全領域の索敵を僅か3秒でやってのけたのだ。

（す、凄すぎますわ……こんな事が出来るなんて……）

そう、アスランは実戦、しかも地上、宇宙問わず戦争をしてきた人間だ。

これはC・E・世界のMSパイロットでは誰でも出来る事、ナチュラル、コーディネーター関係なくである。

基本中の基本だ。

そうじゃないと自分が“戦死”してしまう。

だからこそ、ナチュラルの多い地球連合のMSパイロットはコレをミツチリと叩き込まれる。

反応速度や身体能力で及ばないナチュラルが戦うには反復して体に

覚えさせるしかない。

しかし、アスランの場合その基本動作が余りに速い。

そう、アスラン並の速度はキラやシンの様な化け物クラスでないと  
先ずお目にかかれない。

余談はさておき、一夏は単に驚いているだけだ。

セシリアみたいにその異常さを理解していない。

ある意味で無知が成せる技なのかもしれないが。

そして、セシリアと一夏も同じ様に飛び上がったが、アスランと比べるとどうしても見劣りしてしまう。

一夏にいたっては最初は迷走して何とか飛び上がった程だ。

（コレは、自分の実力を上げて、尚且つアスランさんに近づくチャンスですわ！！）

そう思った瞬間、セシリアは燃えた。

ソレこそ、彼女のバーソナルカラーの青色の炎がメラメラと。

何か知らないがセシリアが燃えている。

何でだろ？

（大方、俺にライバル心を抱いたのか？）

そんな事考えているとセシリアが意を決した表情で俺の所まで飛んできた。

「アスランさん、お願いがありますの」

その言葉に俺はお願いの内容を質問した。

「お願いって何だ？ セシリア」

セシリアは大きく息を吸ってまた吐き出し、ソレを数回繰り返して俺に言った。

「私と一緒に放課後訓練していただきますませんか？ 勿論、アスランさんのご都合に合わせていただきますわ」

どうでしょう？

上目遣いで瞳を潤ませながら懇願するセシリア。

（その顔に俺は弱いんだよ……）

過去にカガリにも同じ顔をされて、アクセサリーを買ってしまった  
り。

メイリンと一緒に食事をしようと頼まれた時もこの仕草に押されて

仕方なく外食をした。

更に言うなら秘書官の女性軍人と一緒に飲み会に参加してくれと頼まれた時もこんな仕草に押されて仕方なく参加した。

コレが引き金となつてカガリと喧嘩した。

考えたら鬱になった。

カガリ曰く『お前は女性に頗る甘い!!』と怒鳴られたのを思い出す。

いや、俺は其処まで甘くない。

無理なお願いは聞かないし、実現可能なラインなら聞くが。

やめよう、鬱になる。

俺は仕方なくソレを了承した。

その瞬間、セシリアは花が咲いた様な綺麗な笑顔を見せてくれた。

今のでクラツときたのは俺だけの秘密だ。

え、ヤッパリ、女に甘い上に尻軽だと？

俺は誠実だ！ ホントだぞ！！

誰に無く言い訳をしている自分が悲しい。

ソレを聞いた一夏も話に加わる。

「俺もその訓練に参加させてくれないか？ 確かに箒と訓練はしているがアイツISについて何にも教えてくれなくて……頼む！ アスラン、この通り」

一夏は白式の左右のマニピレーターを合わせて合唱するようにお願いした。

俺は一夏を安心させる様に言う。

「安心しろ、お前はクラス代表だしな、お前が嫌でも俺からするつもりだった」

ソレを聞いた瞬間、一夏が嬉しそうにお礼を言ってきた。

「サンキュなアスラン！」

コイツ、女が見たら惚れそうな笑顔を向けるな！

何、今度は女だけでなく男もかだと！？

俺はきわめてノーマルだ！！

そんなこんなで俺とセシリアと一夏と箒が訓練用アリーナにいた。

俺が織斑先生に許可を取って貸してもらった。

「と言う訳で、今回の訓練はそれぞれ個別で行う物とする。先ずはセシリアの課題だ」

「ハイ！」

その言葉にセシリアは威勢良く答える。

「先ずはセシリアは射撃技術の向上だ」

その言葉にセシリアが不満の声を上げた。

「基礎ですよ？ 私といたしましては……」

その言葉に俺はセシリアを怒鳴り上げる。

「馬鹿野郎！！ 基礎を疎かにするな！！ そもそもブルーティアーズは射撃メインの兵装が多いだろうが！！ セシリア今のお前は基礎を疎かにしている。キッチリ基礎を叩き込む！！ 課題は10秒間30発、移動する標的に全弾10ホールに確実に当てるのが課題クリアーとする」

その課題にセシリアは非難する。

「そんな無茶な！？」

「悪いが簡単な課題だ！！ レーザー兵器で反動も無いんだぞ！更に最終目標は10秒間に50当てるなんていわない。せめてソレが実戦で使える最低ラインだ！！」

その言葉に肩を落としながらセシリアは頷いた。

「解りましたわ……」

次に俺は一夏に向き直る。

「次に一夏、お前は白式を装備した状態で雪片式型を展開し素振り千本だ」

ソレを聞いた瞬間セシリア同様な顔をする一夏

「何でだよ!？」

「あのな、お前はハッキリ言って体力が無さ過ぎる。セシリアや篠ノ之よりも無い。断言できる。更にお前はISの事について何にも知らない。雪片式型の戦闘稼働時間は？ イグニッションブーストの機体消費エネルギー量とその持続時間は？ 零落白夜の戦闘稼働時間は？ これ等の情報から白式のシールドエネルギーの戦闘での割り振りは？」

次々に上がる俺の質問に一夏は口を閉じた。

「解つただろ？ お前はお前の持っている力すら把握できていないばかりか戦闘時猪突に突つ込む癖がある。先ずはお前がしなければならぬ事は体力作りと兵装の特性を理解する事、そして、エネルギー量をどうやって割り振っていくかが課題だ」

その言葉に一夏は質問した。

「何で、雪片式型を展開してなんだ？」

その質問に俺は答えた。

「雪片が何の犠牲無く展開している訳無いだろ？ シールドエネルギーを消費してるんだよ。だからこそ、雪片が電力を消費する前に千本素振りするしかない。だが、ISを動かすにもシールドエネルギーがいる。つまり、お前はマニュアルでシールドエネルギーを整しつつ、雪片の刃を維持した状態で白式のエネルギー効率を考えて素振り千本をやってもらう。無駄な動きをしたらそれだけ、機体にもエネルギーにも負担が掛かる。その為にある程度は体力や筋力を使う必要がある」

俺の解説を聞きながら一夏は黙って素振りを開始した。

俺は箒に向き直り今度は箒の訓練内容を伝える。

「篠ノ之、お前には座禅を一時間した後、自分の学んだ剣の方を一通りやってもらう」

その言葉に今度は箒が大声を出す。

「何故だ！？」

俺は篠ノ之を見据えながらこう言った。

「悪いが篠ノ之、お前の剣からは焦りや苛立ちしか感じられない。そんな感情で武器を振るえばいつかお前は仲間や友達を傷つける。ならば、少し立ち止まって、自分を見つめなおせ。今のお前の剣技はハッキリ言って脆過ぎる上に力任せすぎる。お前は力を持って何

がしたいんだ？」

その最後の問い掛けに篤は何も言えなくなった。

多分、唯力が欲しかったと言う単調な理由ではないのだろう。  
俺の見立てでは多分、一夏がらみだと思う。

俺の予想では今の篠ノ之 篤を形成しているのは焦りや恐怖。そして、言わなかった何かに対する怯えだろうか。

そう思いながら俺は三人を見ながら思う。

前途は多難だと。

## 第7話 アスラン竜の様な猫と出会う

俺が教室に入ると一夏と数人の女子が話していた。

一夏が俺に声を掛ける。

「おーい、アスラン！」

その呼びかけに俺は鞆を机の上に置きながら返事をした。

「何だ？」

「聞いたか？ 転校生の話？」

転校生？ 何とも季節外れの転校生もいたものだ。

一夏と話していた女子も俺に語りかける。

「そうそう、たしか、その子が2組の代表だって」

「そうか、2組は転校生を代表にしたのか」

俺はそう考えながら多分2組の代表はセシリアみたいな国家代表候補生だろう事を予測した。

何せ、この時期の転入は試験内容が入学以上に難しかったと記憶している。

つまりソレをパスするだけの知識と技術があると言う事だ。

「まあ、ウチには専用機持ちが3人いるからそんな心配は無いでしょう？」

「そうだねーおりむーもセツシーもいるし、いざとなれば学年最強のアスにゃんもいるしねー」

本音の言葉に一夏と他の女子も頷いた。

「その情報、もう、古いよー!!」

何とも元気な声が1組の教室の喧騒を遮断した。

全員が黒板側の出入り口を見る。

「残念だけど2組は専用機持ちなの。そう簡単に優勝させてあげないわよ!!」

何とも気合の入った御嬢さんが現れた。

髪は栗色のツインテール。

背は小柄だが中々重心が安定している。

「あ、鈴？」

「そ、中国代表候補生、鳳鈴音。今日はあんた達、1組に宣戦布告しに来たって訳」

その言葉と共に教室はざわつく。

どうやら一夏の知り合いらしい。

一夏はそれにわき目をくれず少女に語りかける。

「お前ソレ、似合わないぞ」

その言葉に少女は激昂する。

何ともシニールなやり取りだ。

「な、何よ！？ 折角格好よく登場したのにぶち壊しじゃない！！」

彼女のカッコよさの基準が解らんが、後ろにはご注意だな。

少女は頭を叩かれ、上半身だけ前のめりになる。

「イッタ、誰よ！？」

そう言い後ろを振り返ると織斑先生が立っていた。

「いい加減教室に戻れ。邪魔だ」

中々きついな織斑先生。

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。速く行け、馬鹿者」

そう言われ少女、もうめんどくさいので鳳はすごいこと逃げた。

まるで猫が首根っこ掴まれて追い出される感じだ。

時間は流れ、学園食堂。

多くの生徒が昼食を取る為にぎわっていた。

俺、セシリア、箒、一夏、鈴はここで食事を取る為に集まった訳だが。

「しかし、驚いたぞ。鈴がIS学園に転入してきたなんて、しかも中国の代表候補生として」

その言葉に鳳も驚いた様に一夏に言う。

「コッチだつてニユースみて驚いたわよ。行き成り、試験会場でIS動かして騒ぎになったんだって？」

その言葉に一夏は苦笑しながら箸を止め思い出すようにその時の様子を鈴に語る。

「あの時は私立の試験会場で試験が行われていたんだ。その時、迷っちゃって……係の人に聞いても解らないって言うから廊下をウロ

ウロしてたらISを見つけてな」

その時の事を一夏は思い出したらしく遠い目をして語った。

「ふうん」

鳳が気の無い返事を返した時だった。

篠ノ之が二人の所まで歩み寄り勢い良く両手で机を叩いた。

ドンと言う音と共に篠ノ之は烈火の如く一夏に詰め寄る。

「一夏！ ソイツは誰だ！！」

その質問に一夏はたじろぎながらも答える。

「え、あ、ああ、鳳 鈴音、箒が転校して入れ違いで転校してきたんだ。鈴とは中二の頃まで一緒だったぞ」

どうやら鳳も篠ノ之が誰か解らないらしく一夏に質問する。

「コイツ誰？」

一夏は篠ノ之を紹介する。

「ああ、俺のファースト幼馴染の篠ノ之 箒」

「よろしく、一夏の幼馴染の篠ノ之 箒だ」

「此方こそ、一夏の幼馴染の鳳 鈴音よ」

何か知らんがさっきから“一夏の幼馴染”と言うフレーズを強調する二人。

目から火花を放ちあっていた。

偉く苛烈な何かが2人の中で行われている。

何時までも戦闘膠着をさせて置くわけには行かず俺とセシリアはヒソヒソと話し合った。

「セシリア、あの二人会って早々苛烈な何かを繰り広げたぞ？」

「ほおって置いて宜しいのでは？ 女の戦いに首を突っ込むのはマナー違反ですし……それに一夏さんが何とか……」

「無理だろ。一夏の奴、事態が飲み込めなくて困惑してるぞ？」

俺は一夏に目を向けながらそう言う。

事実、一夏は篠ノ之と鳳の間に挟まれ如何すればいいか解らないと言う顔をしていた。

「ではどの様に？」

俺は溜息を吐いてセシリアに言う。

「すまない、先に食べていてくれ。友を見捨てられない」

セシリアは俺の言葉に溜息を吐いて答える。

「私も行きますわ……流石にあの状況はよろしくありませんもの……」

「有難う。セシリア」

俺の言葉にセシリアは頬を赤らめながらも頼もしくこう言ってくれた。

「アスランさんの為なら戦場にだって飛び込みますわ」

其処までしなくてもいいのだが……

まあ、今は一夏を救出する事が先決だ。

俺とセシリアは一夏に話しかける様に誘導する事にした。

「一夏、今日の課題は白式を装備した状態での回避訓練を行う予定だ放課後空いているか？」

俺の問い掛けに一夏は助かったと言わんばかりに頷きながら言う。

「ああ、空いてるぜ。素振りはいいいのか？」

俺はその問い掛けにこう答えた。

「素振りをやってからエネルギーを回復して行っ」

その言葉にヤッパリがっかりして肩を落とした。

その様子をセシリアは微笑みながら一夏言う。

「基礎は大切ですよ？ 土台がしっかりしてないといい家は建てられませんわ」

セシリアは自分も基礎は好きでは無いが、俺の射撃訓練でその基礎の重要性を改めて認識した。

自分がいかに雑な射撃をしていたかが目に見えてわかる。

時間内に正確に的を射抜く事の重要性和不規則に動くターゲットを捉える難しさは骨身に染みていた。

だからこそ、俺の教えは自身の傲慢さを正すいい機会になったと彼女は話してくれた。

「そう言うことだ。セシリア。お前には自分も動きながら射撃してもらおう」

その言葉にセシリアは嬉しそうに答える。

「やっと応用編ですね？」

「まあ、基礎には変わらないがな。篠ノ之、お前は今の訓練と平行して剣技の方の速度を上げる訓練だ」

「解った」

その言葉に毒気を抜かれたらしく篠ノ之は素直に従った。

そんな時だった。

鳳が俺とセシリアを見ながら一夏に質問した。

「一夏、こいつ等、誰よ？」

何とも礼儀を知らない問い掛けに一夏は答える。

「ああ、同じクラスでダチのアスランとセシリア」

「よろしく」

「よろしくですわ」

俺達には興味無いのか鳳は気の無い返事を返す。

「ふん、よろしく」

そんな言葉を投げかけながら一夏に提案する鳳。

「私がISの操縦、教えてあげようか？ 私の方が旨く教えられる  
と思うんだけどな」

その言葉に筈はもとよりセシリアも切れた。

「不要だ！ ザラは1組で同じクラスだ。しかもそれだけじゃない」

「アスランさんは学年最強の称号を持つお方ですよ！！ 更に2、  
3年生にも互角に戦える相手はいないと思いますわ。何せ、『IS  
学園の赤い騎士』『獅子の名を持つ赤い騎士王』『IS学園の赤い  
彗星』ですもの」

何か知らない間に変な異名が増えてる！？

その言葉に鳳が俺をマジマジと見つめながら言う。

「コイツが！？ 動画サイトで変な赤いISが戦う所は話題になったけど。アンタだったの！？ 『IS学園の赤い騎士』は！？」

そんなに有名なのか？

知らなかった。

（と言うより機密もへったくれも無いな……動画サイトで俺の戦闘が撮影されるとは……織斑先生め……ジャステイスの秘密が明るみに出たら如何する気だ？）

俺はそんな事考えながら如何したものかと思った。

「私も訓練に加わるわ！！」

その言葉に俺は拒否した。

「鳳、一応、クラス対抗戦が終わるまで待つてくれないか。お前は2組だし、敵の手の内を晒すのは懸命ではないそちらも手の内を知られて戦うより驚かせた方がインパクトはあると思うが？」

その言葉に鳳は考え込む。

「解ったわ。でも、アンタには負けないから！！」

その言葉に、俺は答える。

「悪いが戦うのは俺じゃない」

その言葉に鳳は目を丸くして驚いた。

「何ですって！？ アンタが出ないで一体誰が！？」

「一夏だ」

俺の回答に鳳は一夏を見ながら言う。

「なら勝ったも同然ね」

その言葉に一夏がムッスとしながら言う。

「悪いけど負けるつもりは更々無いからな」

お互いにらみ合い鳳は食堂を後にした。

## 第8話 アスラン部屋に招待する

俺達は何時もの如く放課後、訓練アリーナを借りて訓練を行っていた。

セシリアは高速動き回りながら高速で動局的を狙い撃つ。

最初は10ホールを確実に当てていくがやはり動きと射撃の荒さは目立つ。

「セシリア、射撃を意識しすぎだ！ もう少しISの機動にも気を使え」

「わ、解ってますわ!!」

セシリアは一杯一杯なのか段々と10ホールから外れていく。

「クッ!？」

セシリアは歯噛みする様に舌打ちして射撃を続行した。

一方、一夏はランダムに動き回り攻撃するシーカーに苦戦していた。

「クソ!!」

「一夏！ センサーと自分の目と両方で確認しながら動け。落とさ

れるぞー!!」

「解ってるってー!!」

そう言いながらもカス当たりする一夏。

次は箒だ。

「箒！ 剣の方が雑だ！ 方を知らない俺でも雑だと言う事が解るぞー!!」

「解ってるー!!」

箒も余裕無く答える。

量産機の箒は兎も角、一夏やセシリアの機体は高スペックなだけに機体に振り回されている。

その意味でこの慣らしの効果も狙っている訳だ。

まあ、前に比べて格段の進歩だ。

成る程、嬉しいもの生徒がスクスク育つと言うのは。

訓練が終わったその足で俺はセシリアに俺の部屋まで来てくれと伝えた。

セシリアは何故か顔を真っ赤にして喜び勇んで行くと云う返答を貰った。

俺の部屋に行く事がそんなに嬉しいのか？

果てしなく謎だ。

私、セシリア・オルコットは有頂天だった。

その理由はアスランさんが私を部屋に呼んだのだ。

その瞬間、気合が入った。

（よし！！ ですわ！！ よし！！ ですわ！！ アスランさんが  
自室に招いてくれた！！ コレは“フラグ”と言う物ですわ！！）

そう思った私は身を清める為にシャワーを浴びて下着をチョイス。

（可愛らしい下着もいいですが大人の雰囲気のある下着もいいです  
わね……）

ア~~~~~もう！！ 迷いますわ  
！！

服も気合を入れませんと！！

私はアスランさんの部屋へ私服に着替えて尋ねた。

胸が高鳴る。

私は意を決して部屋のドアをノックした。

木と指がぶつかる音を聞きながら私はアスランさんを待った。

「はい、今行く」

その言葉と共に益々胸の鼓動が高鳴る。

ドアが開かれた瞬間、アスランさんの私服姿を私はみた。

白いワイシャツに青いジーンズ姿。

胸元のボタンをはだけさせ美しい肌が見える。

（こ、これは……エロいですわ~~~~~~~~!!!!!!）  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!）

私は心で絶叫しながら鼻血をながした。

しかし、外の顔の私は済まして見せる。

ここでアスランさんに無様は見せられませんか！  
乙女の気合を舐めないで頂きます？

え、何ですか？

セシリアはエロいな~~~~~~~~ですって!!

私は健全ですわ!!

と、誰かのボケに対してツコミしたのが何故かむなしいですわ。

アスランさんに案内され入った部屋は何てこと無いIS学園の寮と同じ広さのワンルームでした。

其処にはベットと机とテーブルが置いてある。

アスランは備え付けの台所に行き、紅茶を私に入れてくれました。

いい香りですわね。

この香り、蘭の花の香りに近い香りと言う事はプリンス・オブ・ウエールズですわね。

ダーズリン、ウバと並ぶ三大茶葉の一角、キーマン茶のブレンドですわ。

お茶の選択も悪くはありませんわ。

1日を締めくくるイブニングティーには最高ですもの。

アスランさんは紅茶が好きなのですわね。

「どうぞ」

そう言いながらアスランさんは私の前にカップを置いてくれた。

アスランさんはポットを持ちながらソレをテーブルに置き、こう言った。

「ウエールズは嫌いかな？」

その問い掛けに私は嬉しくなりました。

そして私は今自分出来る最高の笑顔で答えます。

「大丈夫ですわ」

と。

私は福与かな香りを楽しみながらカップに口をつける。

「美味しい……」

自然とその様な声が出てきてしまった。

アスランさんは微笑みながら紅茶を飲み納得したようにこう言った。

「悪くは無いな。クッキーもある。食べるか？」

「頂きますわ」

クッキーを食べながら他愛無い話をする私達。

（あゝ……まるで恋人みたいですわ……）

そんな時だった、アスランさんが私を自室に呼んだ理由を説明した。

「君には俺とチェスと将棋と囲碁を同時にしてもらっ」

その言葉に私は固まりました。

「理由はブルーティアーズはビット兵器を主眼に戦闘を構築する。つまり、三次元で将棋やチェスをしながら相手の陣地を脅かす囲碁の特性を持っている。つまり、君には戦術構築と誘導兵器戦術の基礎が学んでもらう」

そう言いながらアスランさんは箱を取り出した。

「コイツは球体方パズルだ。かなり難易度の高いパズル。コイツで空間把握認識能力の訓練を行ってもらう。つまりだ、空間把握認識能力とは世界を立体的に捉える世界だ。物を立体映像を回転させたみたいに見る力だ。コレは宿題だな」

ソレを聞いた瞬間、私は心で絶叫していました。

(何でこうなるのです~~~~~~~~~!!!)

そして、時は流れいよいよクラス対抗戦。

しかし、一夏と鳳との仲が何故かギクシャクしている。感じとして言えば鳳が一夏を避けて、一夏が如何したものかと言う顔をしている。

そんな感じだろうか？

「いいか、一夏。今回はのっけから鳳とだが自信は？」

その俺の挑発に一夏はにやりとして答えた。

「大丈夫。何とかするぜ」

気合は十分。

準備もしてきた。

体調も万全。

膏が載っている証拠だ。

俺は納得して頷きながら鳳の機体説明を行う。

「鳳の機体は中国の専用IS甲龍、第三世代型ISでパワーから繰り出される接近戦と中距離での射撃が出来る近中距離戦型のISだ。兵装は連結青竜刀型兵装、双天牙月に空気圧作用兵装、龍砲だ。コイツは目に見えない空気の砲弾を撃ち込むタイプだな。しかも砲身も見えないから回避はハイパーセンサーを多用しろ」

「解った」

俺の言葉に頷く一夏。

「よし、行つてこい」

「一夏、頑張れ!!」

「一夏さん、ご武運を」

俺、箒、セシリアの激励に背を向けて右手を上げながら答える一夏。

そして、カタパルトにロックされる一夏の白式。

「織斑 一夏、白式！ 出るぜ！！」

そう宣言して一夏は空に舞い上がった。

俺こと織斑 一夏はアスランに習って自分の名前と機体名を言って飛び出していた。

何故こんな事しているかといえばカッコよかったからに他ならない。

アスランは俺にとって兄貴でもあり師匠みたいなものだった。

何をするにも一々カッコよくてどんな奴等より頭が頗るいい。

更に凄い技術と力と経験を持っていた。

だが、俺が最も心を引かれたのはアスランの心の強さと優しさ。

それに尽きた。

今の俺ではどう足掻いてもアスランにはかなわない。

あの強さも優しさも何もかも。

俺は……多分、超えたいんだと思う。

師匠であり兄であるアスランを。

その為にも俺はこの戦いに勝ちたい。

鈴に勝ちたい。

そう思った。

勝てば答えが得られるかも知れないアスランを超える方法が。

俺はモニターを見ながら腕組みをしている。

開始を告げる宣言から数十秒が経過した。

「いい試合運びですわね」

セシリアの言葉に俺も頷く。

「ああ、一夏の兵装は雪片式型一本のみ。つまりソレしか攻撃オプションが無い。なら、接近して相手を切りつける有効なポジション作りから始まる。いいペースだと言いたい所だが鳳もそれを知って

いる。だからこそ無闇な接近戦を避けて龍砲の攻撃で間合いを取っている。このままでは一夏はギリ貧だ。シールドでエネルギーを持っていかれ、回避でエネルギーも持っていられる」

その言葉に筭が噛み付く。

「何を言う。一夏にはイグニッションブーストがあるではないか！？」

その言葉に俺はこう反論した。

「そもそもイグニッションブーストは強襲、奇襲用の技術だ。しかも単一方向のみだ。一度失敗すれば次からは相手も知る。避け方を考える。相手はマネキンでは無い。生きて考える人間だ。つまりは一回きりの一夏の切り札だ。ソレをおいそれと使えない。一夏もソレを理解しているから出さない」

そう、勝負の鉄則とは相手が嫌がる事をする事にある。

いかに相手の裏をかけるか、いかに相手の思考の外から戦えるか、いかに相手を困らせるか、いかに相手の情報を入手出来るかが勝敗の鍵となる。

しかし、どんなに準備をしても負ける時は負ける。

なら、相手を出し抜くには如何するか？

自分が持っている技術と相手の情報を上手く整理し戦うしかない。

「奇襲の鉄則は相手の予期しない方向から攻撃することにある。方

法は幾らでもある。考えろよ一夏……」

俺は内心焦っていた。

鈴の奴……俺に接近させない為に龍砲を乱射しやがる。

「如何したの一夏？ まさかこの程度とでも言つの？」

ソレで勝てると思ったの？

そんな小馬鹿にした鈴の罵倒が響く。

舐めやがって……

しかし、反撃のチャンスが無いのもまた事実。

クソ、そうしたら……

そうだ！！

アレ、やってみるか……

アスランがやっていた技。

でも初手っぱちで出来るのか？

ああ、もう！！

グダグダ考えるのは止めだ止め！

俺らしくやるぜ！

俺はイグニッションブーストで正面から鈴の前に加速する。

「ハン！ 馬鹿の一つ覚えみたいに！！」

そう鈴は叫びながら簡単に回避した。

今だ！！

俺はP I Cを俺の周辺に展開する。

まるで無重力空間にいる感覚になった。

そして俺はその状態から足を蹴り上げ、体を捻った。

その瞬間、急速に体は鈴の方に向く。

そして、イグニッションブーストを展開した。

俺は一夏の行動に驚いた。そう、ソレは良く見慣れたもの。

C・E・世界では当たり前前の技術。

「アン……バック……だと……そんな技術俺は教えていないぞ!？」

セシリアが疑問に思ったらしく俺の言葉に質問した。

「あの、アンバックとは……一体……?」

セシリアの質問に俺は説明する事にした。

「AMBAC、Active Mass Balance Automatic Controlの略で日本語略は能動的質量移動による自動姿勢制御……そもそもアンバックは宇宙空間の様な無重力空間で可動肢の一部分を高速で動かすことで発生する反作用を機体全体の姿勢制御に使う技だ」

「でも、今は1Gつまり重力がありますわ。どうやって……」

「PICを機体周辺に展開して一時的に無重力空間を形成したのだろう。通常のISの飛行は旋回して回るか機体に急ブレーキを掛けて反転するぐらいだ。しかも、アンバックには美味しい得点がある」

「それは……?」

「エネルギー消費が少ない事だ。旋回するにしても急ブレーキを掛けるにしても違う方向にブレーキを掛ける。つまりそれだけエネルギーを食う訳だが、アンバックはほんの少し機体周辺に僅か0.1秒PICを展開するだけでいい。エネルギーのロスを少なく出来き

更に即座に方向転換できる」

「それならPICをマニュアル操作に切り替えなければ出来ませんわ！！　つまりは同時に機体制御を意識する必要がありますのよ！  
？　それを一夏さんが出来るなんて！？」

その言葉に箒は誇らしそうに語る。

「当然だ！！　一夏は昔から一度教わった事は少し反復すれば出来るようになる！！」

俺は首を横に振って否定した。

「いや、俺は教えていない。確かにセシリアとの戦いと一夏との戦いで披露したがそれだけだ。一夏には高等すぎると教えていなかった」

その言葉に流石の箒も驚きの声を上げた。

「嘘である……　ISに乗って数ヶ月の人間に出来ることか！？」

何であれ一夏の学習能力は驚異的だ。

コーディネーターと対等くらいに。

よし、成功！！

鈴も驚いてやがる。

「な！？ もう反転してる！！」

慌てて鈴は双天牙月を構えるがもう遅い。

「もらった！！」

「チィ！！」

その時だった。

突如、アリーナを覆っていたシールドが砕け散った。

突如として俺も鈴も動きを止めた。

「何だ！？」

「何！？」

奇しくも俺と鈴は同じ様な言葉を発した。

## 第9話 アスラン敵を撃破する

何だ、アレは。

俺はそう考えながら体は動いていた。

「セシリア、篠ノ之、俺は教師専用管制室まで行く」

俺の言葉にセシリアも篠ノ之も着いて行くといった。

俺は仕方なくソレを了承し走り出した。

俺が教師用管制室の自動ドアを開けると其処にはオペレーターの先生が生徒に避難指示と避難経路の案内を行っていた。

俺は状況を確認すべく織斑先生に語りかける。

「状況は？」

その言葉に織斑先生は明確に答える。

「1分前、何者かが外部遮断シールドを破壊。その穴から1機のISが進入した」

敵勢力IS一機のみか。

「生徒の避難は？」

「現時点では70パーセント。残り30パーセントが誘導中だ」

「救出部隊の編成は？」

「現在、IS教官部隊を編成中だ」

「編成時間は？」

「後、10分」

遅すぎる。

「スクランブルが掛かってまだ飛び立たないとは、とんだ話だ」

俺が吐き捨てるように言うと山田先生が非難する。

「こんな事1度も無かったんですよ？ それを即時対応などと」

俺はその山田先生の言葉にこう返した。

「非常事態は何時起こるか解らないから非常事態と言うのです。山田先生、IS学園は安全と言う概念は捨ててください。何せ、ここにはISと言う“兵器”がある。襲撃者もソレを理解している。被害があつてからでは遅すぎます」

「お前はそんな説教を垂れる為に態々来たのか？ 違つたら？」

織斑先生の言葉に用件を述べる。

「救出命令を、俺に下さい。最悪、敵は“撃破”します」

その言葉に千冬は俺を睨み付けた。

「学園で人死にはご免だと言ったはずだが？ ソレにお前は生徒だ。出すわけにもいかん」

俺は織斑先生を怒鳴っていた。

「今は非常事態だ！！ ここで生徒が死ぬかも知れない状況を放置している場合ですか！？ 今、即時に動かせる兵力は俺とセシリアだけだ！！ なら貴女はこれ以上の被害を出さずにこの混乱を収拾する義務と責任がある！！」

俺は尚も怒鳴る。

「力と権利を持つものはその責任を果たせ！！ 義務を果たせ！！ 下らない論理はこの際切り捨てろ！！ 少しの判断の遅れが取り返しのつかない結果を招く！！ なら今は、行動の時だ！！ ここで決断しなければ、もっと多くの人が傷つくんだぞ！！」

その俺の怒声に織斑先生は溜息を吐いた。

「ザラ、教師にそれだけデカイ口を叩いたんだ。死人ゼロで納める自信があるのだろうか？」

「少なくとも学園側の人的被害をゼロに出来る自信があります」

織斑先生が溜息を吐いて命令した。

「解った。緊急出入り口は開けておく。リミッター解除は時間が間に合わん。許せ。その代わり、織斑と鳳は助ける。他の生徒は此方が面倒を見る。いいな？」

俺は背筋を伸ばし敬礼した。

「了解！」

「私も行きますわ！！」

セシリアはそう言いながら俺の後に続く。

「いいのか？」

俺の質問にセシリアは答えた。

「援護射撃くらい出来ますわ」

「解った。セシリアは俺の援護射撃と敵の牽制を頼む」

「了解ですわ」

その言葉に篠ノ之も続くが流石にISを持っていない彼女を生身で戦場に放り出すわけにも行かない。

「篠ノ之は生徒の避難誘導を頼む」

「何故！？」

その言葉に俺は怒鳴る様に言う。

「戦場に出る事だけが戦いではない。自分の出来ることをしろ！！  
いいか、戦いだけが全てを決めるのではない。俺達の勝利は人的  
被害ゼロだ。その実現の為に迅速に生徒を非難させる必要がある。  
それも立派な戦いだし、勝利にも貢献している！！ だから、お前  
も今出来る戦いをしろ！！」

「……解った……」

篠ノ之は悔しそうにそう呟いた。

「よし！！ セシリア！！ セシリアはISを即時展開した後敵勢  
力に牽制射撃だ。一夏と鳳の撤退時間を稼げ」

「了解ですわ！！」

俺とセシリアは全力疾走で駆け出した。

一夏と鈴はどうか動き回りながら敵と戦っていた。

「コイツ！！ 硬すぎるわよ！！ どうなってるのよ！？ コイツ  
のシールドは！？」

鈴の悲鳴に近い絶叫に一夏も同意した。

「クソ！！ 硬え！！ 何だよ！？ 雪片が通らねえぞ！？」

敵のISは指からビームらしき物を撃ち込む。

何とか回避する一夏と鈴。

「どうすんの一夏！？ 私たちにはパワーが……」

鈴の言葉に一夏も頷くしかない。

事実上、零落白夜は撃てて後一回。

イグニッションブーストは使えない。

（こつなつたら……）

一夏は覚悟を決めて鈴を見据えた。

「鈴、すまないが、罔になってくれ。相手の注意が逸れた隙に零落白夜を叩き込む」

その一夏の言葉に鈴も頷く。

「それしか打開策がないわね……解った、出来るだけやってみる」

その言葉に一夏は嬉しそうに礼を言った。

「サンキュな鈴！」

鈴は一夏の笑顔に当てられ頬を染める。

「顔赤いぞ鈴？」

「五月蠅いわよ馬鹿！ ミスったら承知しないんだからね！！」

「ミスるかよ馬鹿！！」

そう言いながら一夏は飛び立つ。

「馬鹿とは何よ！！」

そう叫びながら鈴も衝撃砲を乱射する。

案の定、敵は鈴の方に釘付けになる。

一夏はやはりと思った。

（コイツ、攻撃される対象にしか反応しない。脅威の優先順位が攻撃する奴が一番、二番目が動く対象か、ロボットだぜそれじゃあ）

そう、一夏は敵ISがAIではないかと思っていたが案の定だった。

その裏づけも鈴の攻撃で取れた。

（後は、零落白夜を叩き込む）

一夏は通常の加速で敵ISに迫り零落白夜を叩き込むが、敵がそれに反応し一夏のどてっ腹にその拳を叩き込んだ。

吹き飛ばされてアリーナ外壁に叩き付けられる一夏。

「一夏!？」

鈴の悲鳴が聞こえる。

しかし、一夏は笑っていた。

「おせーぞ二人とも」

その言葉と共に敵ISを囲む様に“五方向”から青いレーザーが放たれる。

敵は不意打ちだったのか絶対防御が発動し、その悉くが弾かれる。

「あら、コレでも早く来ましてよ？」

優雅にライフルを構えながらセシリアは違う位置に移動しながらブルーティアーズを操作しライフルを構える。

「特訓の成果見せてあげますわ!!」

そう宣言するとセシリアは不規則にブルーティアーズを操作する。

自分も移動しながら精密射撃を行った。

セシリアの不規則なビットの連続攻撃と本体のライフルによる攻撃で敵は翻弄される。

そう、まるで一夏と鈴から引き離されるように。

次の瞬間、一夏の前に一陣の赤い風が吹き抜ける。

其処にはジャスティス、アスランが立っていた。

「アスラン！！」

一夏はホットした様にその名を呼んだ。

「良く耐えたな。一夏と鳳は下がれ。後は俺がやる」

そう言うとアスランはビームライフを射撃しながら飛び出した。

一夏もセシリアも俺が教えた以上の事を見せてくれた。

なら、先生の俺が落第点は取れんだろ。

そう思いながらジャスティスを動かすが遅い。

（クソ！！ リミッターの影響が遅すぎる！！）

射撃はシールド破壊は出来たが絶対防御は無傷だった。

しかも、俺のモニターにはエネルギー消費量が表示されていた。

そう、ハイパーデュートリオンの核エンジンジェネレーターをカットしてデュートリオンジェネレーターのための機体仕様だ。当然、シールドエネルギーも無限ではない。

なにせ、ハイパーデュートリオンとは核エンジンとデュートリオン、2つのジェネレーターが相互補完しているので理論上パワーダウンは有り得ないハイブリットエンジンだ。

その内どれか一つがカットされればジャステイスの兵装供給電力を維持できない。

それだけジャステイスの兵装のエネルギー消費量はずば抜けて悪い。核ジェネレーターだけなら旧ジャステイス並に出力が落ちてしまいうし、デュートリオンだけならすぐガス欠だ。

だからシンも撤退せざるを得なかった。

その為、兵装消費電力を落とし、VPS装甲消費電力も調整された。

お陰で他のISみたいに燃費が悪い。

一応、ジャステイスにも絶対防御があるみたいだが、VPS装甲と相まってかなり消費量が激しくなる。

それでもフル充電のシールドエネルギーは1200と他のISを大きく引き離す。

俺は接近戦を仕掛ける。

ビームライフルとハイパーフォルティスビーム砲を撃ちながら牽制する。

ビームライフルは簡単に絶対防御に阻まれたが、ハイパーフォルティスは絶対防御を破壊した。

だが、相手には届かない破壊するだけだ。

（ならば、接近戦で叩く！！）

俺はそう思いながらビームサーベルを両方抜刀し、敵前に躍り出る。

敵のエネルギー砲をかわしながら両腕部を切断する。

そして、左手のビームサーベルの出力を最大にして相手の右わき腹に叩き込む。

その瞬間、絶対防御がひび割れていく。

（クソ！！ 最大出力だとシールドエネルギーの消費が早い！！）

しかし、敵も俺を引き剥がす為に残った足で攻撃する。

「甘い！！」

俺は一旦離れ、相手の蹴りに合わせる様に右のグリフォンビームブレードを展開して相手の足を切断した。

敵の右足が火花を散らしながら吹き飛ぶ。

そして、体勢が崩れる。

俺はそんな決定的隙を逃さない。

右手のビームサーベルを最大出力にして突き入れる。

暫く絶対防御が拮抗した後、絶対防御を貫通し相手に突き刺さる。

まるで機械に突き入れた感触。

どうやら人間ではないらしい。

俺が桃色の刃を引き抜くと敵は力なく崩れ去る。

こうして、俺達の戦いは終わりを告げた。

## 第10話 アスランハロハロ協奏曲

俺は今回の事件の詳細を確認する為に織斑先生の所に来ていた。

俺はあくまで二人だけで話がしたいと呼びつけたのだ。

「先生、率直にお尋ねいたします。あのISは無人機ですね？」

これは皆が知る所の確認である。

「そうだ」

その肯定に俺は次の質問をした。

「あの無人IS、そのコアは回収している筈です。なら、ISにコアナンバーはありましたか？」

これは確証ではなく俺の考えだ。

この世界に無人ISを開発した国家、組織、企業は存在しない。  
なら、答えは自ずと明らかになる。

俺の質問に織斑先生はあくまでも極秘事項で押し切る。

俺はその答えに自身の考えが正しい事を確認できた。

織斑先生は基本的には嘘はつかない。極秘事項で学生においそれと教えられないのは重々承知。

「解りました。これ以上は問いません。最後に質問して宜しいですか？」

これこそ俺が確認したかった事だ。

「今回の襲撃を計画、実行したのは篠ノ之 束博士ですね？」

その言葉に、ほんの僅か、常人では気付かない位に織斑先生の眉根は動いた。

「お前の事だ。そう思う根拠があるのだろうか？」

言ってみろ。

その目線が俺にそう告げていた。

俺は、何故その考えに至ったのかを説明した。

「まず、あの無人IS、あのISは無人で動いていた。つまり、遠隔操作或いは自立制御AIが搭載されている可能性がある。今の所ISを無人で動かせる国家、組織、企業は存在しない。もし、無人で動かせたなら国防に置いて大きな一歩となる大々的に喧伝される筈だ。なのに何処もそんな情報は無かった。ハッキングまでして洗い出しをしました。間違いないでしょう。つまり、あれは個人、或いは小規模の組織が運用した事になる。しかし、個人や小規模組織でISを運用するなど不可能だ。襲撃にしても可笑しい。先ず襲撃の基本は相手の戦力をそぎ落として陽動とかく乱を行い本命を叩く

のが鉄則で更に退路の確保も必要だ。しかし、ソレすらない。現にIS学園の警備や緊急即時対応は策で俺が襲撃者なら教師、生徒のIS保管庫や整備室、更に職員室や待機室、教室を襲撃してかく乱と陽動と敵戦力低下を行ってから襲撃を行う。しかし、敵は真つ先に一夏達に所に襲撃をした。もしソレが陽動やかく乱なら狙われるのはIS保管庫だがそんな形跡は一切無い。つまり、目的は一夏達だ。だが、鳳や一夏の経歴を調べても後ろ暗い所は余り無かった。つまり、襲撃される可能性があるとするなら一夏達のISの奪取。しかし、敵はISを奪取する所か破壊するような素振りさえ見せた。しかし、ソレにしては急所や致命傷を避けた攻撃が目立つ。威力偵察にしては派手すぎる。俺が敵なら破壊工作を学園内で行い。試合を中止させ、一夏と鳳を分断、然るべき後に各個撃破しISを奪取する作戦の方が被害は少ない。更に言うなら一人でいる所をコッソリ暗殺する方が早い。こんなの素人でも思いつく事すらしなかった。なら目的は一夏達の威力偵察だが兵数の少なさや撤退経路が無い。たとえ使い捨ての駒でも自分達の形跡を残すような襲撃は避けるべきだ。なのに敵は証拠物件をあんなに残してくれた。つまり、コレはメッセージだ。ナンバーの無いコア、そして、何処にも無い無人機、詰まる所コレは篠ノ之 束のメッセージ。では、一体誰に宛てたメッセージなのか、貴女ですね？ 織斑先生」

俺の説明に織斑先生はこう質問した。

「お前の仮説が正しくて、なら束は何が目的で私にメッセージを残した？」

「白式を開発したのは篠ノ之博士だと私は考えます。そして、一夏や篠ノ之の話聞く限り彼女は自分の研究成果と自身の作った物、自分が興味のある物、そして、自分が認めた一握りの人間だけしか興味の無い人間だ。なら、コレは一夏と白式の戦闘テストだ。そし

て、その犯人が博士である事を貴女だけに教えた。つまり、これが一夏と白式をテストする為に次も同じ様な、或いはステップアップした事を行うと言うメッセージだと俺は考えます。まあ、コレはあくまで俺の仮説ですが」

最後に俺はそう付け加えながら織斑先生に背を向けた。

その背に織斑先生は語りかける。

「ではお前の仮説が正しく、襲撃がまたあった時は如何する？」

俺はその問い掛けに振り向きながらこう言った。

「全力で叩き潰します。悪いが、この世界は彼女の遊び場でも実験場でも無い。まして、一夏は実験動物ではない。人だ。更に、自分の為に他人を踏み躪り何とも思わない様な奴は俺の敵です。倒します」

俺はそう言いながら去った。

1時間目が終わり、俺はセシリアの所に行く。

「如何しましたの？ アスランさん。珍しいですわね」

俺はセシリアにある提案をした。

「目を瞑って手を出してくれるか？」

その言葉に、セシリアだけでなく一夏や箒を含む全生徒と織斑先生も俺に注目した。

「わ、解りましたわ」

セシリアは戸惑いながらも右掌を上にして俺に差し出した。

俺は彼女の手にある物を載せた。

「ハロ、マスターに挨拶」

『ハロ、ハロ！ セシリア！ ゲンキカ！！』

一瞬、セシリアは戸惑いながらも掌の丸い物体を繁々と見つめた。

「か、かわいいですわ……これは何んですのアスラン？」

「ああ、ハロだ。ソイツはISの操作系調整プログラムの補助なんかもかねたタイプだ。整備に役立ててくれ。後、書類整理も自分からパソコンに接続して音声入力で書き込む事が出来るし、音楽も取り込んで聴く事や、同じハロ同士なら通信も出来る」

そう、俺がラクスに送ったタイプとは違うマスコットロボット、ハロである。

この世界の技術に合わせて俺が作った。

セシリアのハロはスカイブルーでセシリアをイメージしているカラ

ーリングである。

今度は一夏と筈に向き直り、一夏にもハ口を渡す。

「セシリアとは色違いの白ハ口と赤ハ口だ。ソレもセシリアと同じ機能が付いている」

『ハ口、ハ口！！ イチカガンバレ！！』

『ホウキ！ ホウキ！ ヨロシクナ！』

次の瞬間、女子が俺の前に殺到した。

「ザラ君！！ 私も作って！！」

「アスランさん私にも作って！！」

俺は何とか抑える為にこう言った。

「悪いがアレは試作品で3つしか作れなかった。材料も切れたし、また今度な」

そう言いながら女子は渋々と撤退した。

その時、俺は織斑先生に呼び止められる。

「ザラ、材料があつたら作れるのか？」

俺はその言葉に材料があればと答えた。

「なら、私用に1機と整備部の連中にも作ってくれないか？」

「構いませんけど……」

「よし、コレで無駄な書類整理から解放される」

かくして、ハロが整備部と職員室を『ハロ、ハロ』言いながらピョンピョン跳ねている光景が見られるようになった。

襲撃事件の事後処理が終わった時だった。

我がクラスに転校生が二人現れた。

一人は小柄で金色の髪をポニーテールにした男子。  
もう一人は女子にしては小柄で銀髪をストレートにし、左目を覆う眼帯が特徴的な鋭い目をした女子だった。

「それではお二人とも、自己紹介をお願いします」

山田先生の言葉に金髪の少年が先陣をきって自己紹介を開始する。

「初めまして、フランスから来ました。シャルル・デュノアです」

その自己紹介と共にざわめく教室。

「男……！？」

「男子よね？」

そのざわめきに俺は人差し指で耳栓をした。

「ハイ、そうです。ここに2人の男子がいて聞いてきたのですが……」

その肯定の言葉と共に教室が割れんばかりの黄色い声で染まる。

耳栓しておいて良かった。

一夏なんか耳を押さえてるぞ。

鼓膜は大丈夫だろうか。

それにデュノアも戸惑ってるよ。

しかし、デュノアか……

世界シェア第3位のデュノア社に嫡男がいたとは知らなかった。

何とかその場の喧騒を山田先生が抑えると今度は銀髪の少女に自己紹介を求めるが少女は無反応。

「ボーデヴィツヒ、挨拶しろ」

「了解です。教官」

織斑先生に諭されようやく少女は口を開く。

しかし、教官か。

確か、織斑先生はドイツ軍のIS部隊の教官をやっていたはず。  
その為か？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

その名前しか名乗らない自己紹介に流石の山田先生も啞然とした。

「あの……以上ですか？」

「以上だ」

取り付く島も無いとはこの事かと言わんばかりにボーデヴィツヒは自己紹介を切り上げた。

そして、一夏の前に歩み寄り、彼の頬を叩いた。

流石の俺も何事かと思う。

「何だよ！？」

一夏の怒りの声も無視して彼女はこう言った

「認めない。お前があの方の弟など私は認めない」

その言葉と共に彼女は自分に割り当てられた席へと腰を下ろした。

（全く、IS操縦者とはこんな奴等ばかりか？）

俺はそう思いながら窓の外に視線をやるのだった。

## 第11話 アスラン5人と戦う

何ともインパクトの強い登場の仕方をした季節外れの転校生を加えた1組と2組の合同でのIS訓練が行われる。

俺と一夏とデュノアは何とか女子の波を掻き分け更衣室に到着した。

しかし、最近上級生も絡んでの人の波に俺は内心辟易していた。女子には彼氏がないのだろうか？

そんな邪推までしてしまう。

流石に初日からコレではデュノアもさぞ面食らうだろう。

案の定、走りつかれて膝に手を付いて荒い息をしている。

「何とか振り切ったな」

「ああ。しかし、毎度毎度する事が無いのか？」

一夏の言葉に俺は愚痴る。

デュノアも息を整えながら俺達に詫びた。

「ゴメンね……迷惑かけちゃって」

その言葉に一夏は気にするなと言う。

俺も実際は気にしてない。

「兎に角、着替えるぞ。織斑先生の授業に遅れるなど自殺行為だ」

「ウオ！？ もうこんな時間！？」

俺の言葉に一夏は慌てて着替える。

その様子を見てデュノアが俺達に背を向ける。

「それにしても……アスランって思いの他ガタイがいいよな」

「まあ、鍛えてるからな」

「それにしてもガタイ良すぎだろ？ シャルル？」

その問い掛けデュノアは両手で顔を押さえながら真っ赤になる。

「うっうっうん、そうだね。あははは……」

何とも1組に雰囲気ガシガシしているのは気のせいだろう。

俺はそんな事考えながら織斑先生の講義を聞く。

「本日から実習を開始する」

『ハイ!!』

俺達は織斑先生の言葉に返事を返した。

「まずは戦闘を実演してもらおう」

まあ、俺が出る事も無いだろう。

ジャステイスを人目に曝す行為は織斑先生ならしない。

「鳳、オルコット」

「ハイ」

「ハイ」

「専用機持ちなら直ぐに始められるだろ？ 前に出る!!」

「めんどいな、何で私が……」

鳳は嫌々前に出る。

「は……何かこういうのは見世物の様で気が進みませんわね……」

セシリアも不満タラタラだ。

そんな2人に織斑先生が歩み寄り、小声で呟く様に言った。

「お前等少しはやる気を出せ。あいつ等にいい所を見せられるぞ?」

その言葉に俺は誰にいい所を見せるんだろ？

と、疑問に思った。

「やはり、ここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですね！」

うお！？ 何か知らんがやる気になったなセシリア。

「実力の違いを見せるいい機会よね。専用機持ちの」

鳳も何かやる気出してるし！！

俺の後ろで一夏とデュノアが話す。

「先生、一体何話したんだろうね？」

「俺が知るかよ……」

会話は読唇術から解ったがあこの二人にとってカンフル剤になるかが疑問の言葉だ。

「それでお相手は？ 鈴さんとの勝負でも構いませんか？」

セシリアは優雅にそう言うと鈴も望む所と鼻で笑う。

「フフン。コッチの台詞。振り返ちよ」

そのやり取りに織斑先生が割ってはいる。

「慌てるな馬鹿共、対戦相手は……」

織斑先生が対戦相手を言おうとした瞬間、上空で何か落下する風切り音が響く。

何だ？

俺が空を見上げると山田先生が上空から降ってきた。

しかし、凄い落ち方だ。

錐揉み回転しながら落ちている。

まるで撃破されたみたいだ。

俺はそう思いながら回避する。

しかし、回避が遅れた一夏が衝突。

不慮の事故で一夏が山田先生の胸を鷲掴みにして鳳がキレて双天牙月を連結して一夏に投擲した。

しかし、まあ、山田先生なら大丈夫だろう。

二発の銃声が当たりに轟き、双天牙月が地面に突き刺さる。

ラファールの兵装、51口径アサルトライフル、レッドバレットを構えた山田先生がブローン射撃で撃ち落したのだ。

しかし、いい腕だ。

その腕前を理解したのかセシリアは驚いていた。

まあ、見かけでは頼りないだろうが山田先生も元代表候補、コレくらい造作ないだろう。

どうやらセシリアはそれに気が付いてる。

油断と慢心は敗北を自信と覚悟は勝利をと常に教えている。

冷静になって物事の本質を見ろとも教えている。

（いい目だ。油断は捨てたな。後は何処までやれるかだ）

俺はセシリアを見ながら考える。

（セシリアがキラほど動けたら……）

動けたらどういうのだ！！

全く、下らん事を我ながら考えるな。

そうしている内に模擬戦は開始された。

まあ、結果は、最初に鳳が落とされ、セシリアも粘ったがやはり経験の差か上手くあしらわれ撃破された。

俺とセシリアは放課後、俺の部屋で紅茶を飲みながら今回の戦いの反省会を行っていた。

「セシリアは撃ち過ぎだな。短期決戦ならそれもいいだろうが、長期決戦だと辛くなるぞ」

俺の言葉にセシリアはその顎にてをやりながら唸る。

「ですが、今回は撃たざるを得ませんでしたわ。相手は山田先生ですし……」

そう、セシリアは自分より上の相手との対戦が少ない。

「チョット早いが俺と模擬戦でもするか？ 一応、俺も砲撃戦、射撃戦、至近距離戦と全てのレンジに対応出来るし」

「本当ですか？」

セシリアは嬉しそうに俺に問いかけた。

「ああ、実戦訓練からも学ぶ事があるだろう？」

「はい！ 学ばせていただきますわ！」

そう言いながら俺とセシリアは歩き出す。

翌日の放課後、俺は一夏、セシリア、箒、鈴、シャルの5人と一緒に訓練していた。

因みに箒と鈴とシャルにはファーストネームを呼ぶ事を許してくれた。

「そうだな、ここで5人の实力を知りたいし5対1で戦ってみるか」

俺の言葉にセシリア、一夏、箒は納得してそれぞれ得物を構えるが鳳とデュノアは躊躇う。

「え！？ 5対1！？ アスラン、それ冗談だよな？」

「アンタ！！ あたし達を舐め過ぎじゃない！？」

その言葉に一夏が緊張した顔で言う。

「悪いが、アスラン相手に常識は通用しないぞ。気合入れろ」

セシリアも額に薄っすら汗を流しながらライフルを構えた。

「そうですわ…… 覚悟して挑みなさいな」

箒も日本刀型兵装を構えながらアスランを睨む。

「ここではそんな慢心を捨てろ！」

その3人の様子に2人はコレはただ事ではないと自分達の得物を構える。

「では始めるぞ！！」

俺の掛け声と共に訓練は開始される。

ほう、セシリアは後方に下がって一夏と箒の援護とシャルと鈴のつなぎをやっている。

教えた通りだ。

俺はセシリアの射撃を回避しながら一夏と箒のツートップを牽制射撃する。

「ああ、クソ！！ 射撃が上手すぎる！！」

「このままではシールドエネルギーが減らされる」

一夏と箒は愚痴りながらも何とか回避する。

「一夏さん、箒さん！！ 一旦下がってくださいまし！！ 二人が突出したら援護射撃が出来ませんわ！！ シャルルさんと鈴さんは一夏さんと箒さん達の援護を！！ ここは一旦立て直して陣形を組み直しますわ」

セシリアめ、中々指揮官が様になってきているな。

「セシリア、何か手段があるの！？」

「一夏さんはトップで！ 箒さんは一夏さんの後方5メートル感覚で4時方向に！ 鈴さんは箒さんの7時方向に！ シャルルさんは鈴さんから5メートル後方7時の方角に！ 私はシャルルさんの後方7時の方角につけますわ」

その陣形の通りに並ぶ5人、まるでその姿は龍が鎌首擡げるような

姿だった。

成る程、俺が教えた陣形で龍陣、ドラゴンフォーメーション。先頭の一夏に求められるのは打撃力と機動性と打たれ強い体力が要求される陣形だ。

悪くない。

守っていてもジリ貧、バラバラに戦っていても各個撃破なら、俄かでも陣形を作り動き易くしたか。

後方のセシリアとシャルルが援護射撃を行い一夏と箒と鈴を助け、中距離戦の繋ぎとして鈴を配置、そして、追撃に箒、追い討ちに一夏か。

だが、その陣形は欠点があるぞ、セシリア。

ソレは一夏の白式の打たれ弱さだ。この場合の陣形は一夏をトップにすえて後方両翼に、箒と鈴、その中央にシャルル、シャルル後方10メートルにセシリアを配置した超攻撃型オフENS陣形、蜂矢の陣、ホーネットアローか、一夏をトップに後方両翼に箒と鈴、その後方左右にセシリアとシャルルを配置する魚鱗の陣、スケイルが最適だ。

俺は、一夏に集中砲火を開始する。

「龍は頭を撃たれたら死ぬ！ 一夏のISの打たれ弱さを考えるべきだったな！」

確かに一夏の零落白夜は協力だが、発動にはシールドエネルギーを大量に持っていられる。

更にイグニッションブーストは燃費が悪い。

避けられてビーム兵器でも集中砲火を浴びせられればなんて事無い直ぐにエネルギー切れだ。

一夏がシールドエネルギーエンプティーになるとアレよアレよと総崩れになった。

こうして、俺との訓練は終了した。

## 第11話 アスラン5人と戦う（後書き）

はい、ここで5人いたしロマサガの陣形、龍陣を入れてみました。

まあ、蜂矢の陣や魚鱗の陣は武田信玄など戦国武将が陣形として使っていたものを入れてみました。

## 第12話 アスラン黒兎を取り逃がす

俺と一夏達が自由時間で実習を選択し訓練を行っている。

今は、一夏とシャルルが対戦中だ。

「それじゃあ、僕を捕らえられないよ？ 一夏」

シャルルは上手く牽制射撃で距離を取りながら一夏を相手取る。

「クソ！！ 散弾と通常射撃の切替が早すぎる！！」

一夏としては散弾と通常射撃の緩急がある射撃は経験が無いのか次第にシールドエネルギーをすり減らされる。

（シャルルの奴いい射撃だ。一夏の機動能力や零落白夜の特性、兵装を理解した上で……だがまだ甘いな）

俺はそんな事思いながら一夏とシャルルの演習を見ていた。

まあ、結果は一夏の惨敗。

俺とシャルルは一夏にレクチャーをしていた。

「一夏、お前は射撃兵装の特性を理解しきれていない。あれ程教えただろ？ 射撃兵装の特徴は大きく分けて3つ、一つ目は直線型射

撃、二つ目は面型射撃、3つ目は有効加害範囲射撃の3種類だ。シャルルはこの3つの内2つ、直線射撃と面型射撃のみで戦いを進めた。コレは一夏、お前が射撃特性を理解せず悪戯に直進しかなかったのが原因だ」

一夏は俺の説明を考えながら反論する。

「でもよ……俺の白式は接近戦兵装オンリーだぜ？ さらに悪い事にイコライザのバススロット容量事態が開いてないんだぜ？ 射撃兵装なんか搭載できないよ」

俺とシャルルはその言葉に考え込む。

「多分だけど……それってワンオフアビリティの方に容量を使っているからだよ」

シャルルの答えに俺も思うところがあるのか考える。

「なる程な……だからバススロットが無いのか……だが、あの零落白夜は織斑先生のワンオフアビリティの筈だ……何故一夏に？ そもそもワンオフアビリティは各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のはず。詰まる所は人其々に違うんだが、何故だ？ 確か、論文で読んだ事があるが各コアにはそれぞれ好みが存在するらしくその好みと操縦者が一体となった時にワンオフアビリティが発動し易いと言う内容だったが……」

シャルルも首をかしげながら考える。

「そうだね……疑問は其処だね。織斑先生の弟だから出来たって訳でも無いし……その論文も僕は読んだ事無いから何ともいえないけ

ど……」

俺とシャルルはお互いに首を捻りながら考える。  
その間、一夏は置いてきぼりの格好だ。

「なあ、結局、俺に射撃兵装は使えるのか？」

その言葉に俺は何とも言えない表情で返した。

「使えると言えば使える。使えないと言えば使えない、と言った所か……」

俺の言葉にシャルルもウンウンと頷きながら答える。

「まあ、口で言うよりやってみた方が解り易いか……シャルル、ライフルをアンロックして一夏に貸してやってくれないか？」

「そうだね。その方がいいかも、でもアスランのビームライフルがあるはずだけど」

「あるが白式と言うよりジャスティス以外では使えない。俺のビームライフルはマニピレータードライブ方式だからな。ドライブが合わないとは撃つ事すら出来ない。たとえ撃てたとしても白式に限らず通常のISのエネルギー蓄積量だと20発撃てれば精々の燃費が悪い兵装だ。今の所は出力を落としてるが、最大出力時の通常射撃だと1撃で絶対防御が貫通、ISの装甲も貫通して地面に大きな穴が出来る程の威力だから……収束射撃モードだと人間がミンチになって地面が吹き飛ぶ。下手に撃てないし貸せない」

ソレを聞いた一夏は黙ってシャルルのライフルを借りた。

シャルルも黙って一夏にライフルを手渡した。

正直、そんな危ない物一夏としても使いたくないらしい。

一夏はシャルルの射撃訓練を受けながら的を射抜いていくがどうも初心者射撃だ。

その様子を見ていた女子3人は恨みがましそうに見ているが置いて置く事にする。

正直、女性に嫉妬は恐ろしい。

順調に射撃は進み、トータル43ポイント。

セシリアはスタンディング射撃、10秒で97ポイントとするなら初心者が始めて銃を撃つのでからまずまずだろう。

流石にキラみたいに行き成り、射撃初心者で10ホール全てに当てるのは早々いないだろう。

俺はジャステイスを頭部装甲以外の全てを展開する。

「まずまずだな。まあ、初心者にしては良くやったと言った所だ」

その言葉に一夏がムスとしながら俺に言う。

「じゃあ、アスランは射撃は得意なのか？」

その問い掛けに、俺は無言でターゲットを呼び出し射撃を開始した。

その瞬間、切れ間が解らない程の射撃速度でど真ん中を撃ち抜く。

結果はトータル100ポイント。

「まあ、コレだけ出来れば上等か？ 俺より射撃が上手い奴はここから5キロ先の標的を同じ速度で撃ち抜くからな……後、15キロ先からど真ん中を撃ち抜く狙撃手もいるぞ」

まあ、前者キラで後者はディアツカだ。

事、射撃戦、狙撃戦になるとあいつ等の土俵だ。

ソレを聞いた瞬間、一夏とシャルルはもとよりセシリアも啞然とした。

明らかに人間の限界を超えた所業だ。

アスランですら人間超えた速度で射撃しているのにその上がいると言うのだ。

その言葉にセシリアが驚く。

「じゅ、15キロって……人間に例えるなら1500メートルの長距離狙撃ですよ！？ 専用のハイパーセンサーとライフルが無いと無理ですわ！！ 人間ですよ！？」

そう、セシリアだから理解できる異能さだろう。

彼女も狙撃の心得がある。

まあ、アイツは、ディアツカは事、狙撃一点“だけ”ならキラにす

ら勝つことが出来る男だ。『狙撃手になる為に生まれてきた男』とザフト軍全体でそういわれている。

派手好きのあの性格から本人は嫌がっているが。

余談は兎も角、俺は一夏に射撃の基礎を徹底的に教える事にした。

その時だった、周りが騒がしい事に俺が気が付く。

俺が騒ぎの現況を見つける。

アリーナピットカタパルト付近にそれはいた。

黒い装甲に右側に大きな砲。

アレは……

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

セシリアの言葉に鈴がボーデヴィツヒを睨みつけながら質問する。

「何？ アイツなの！？ 一夏を引っ叩いたって言うドイツの代表候補生って！！」

第も警戒感露ににらみつけた。

「織斑 一夏」

ボーデヴィツヒは周りの喧騒を無視して一夏を指名した。

「何だよ？」

一夏はシャルにライフルを返ししながらボーデヴィツヒの問い掛けに答える。

「貴様も専用機持ちだそうだな？　なら話が早い。私と戦え」

「え？」

「嫌だ。理由がねえよ」

その言葉にシャルルが驚き、一夏は否定する。

「貴様に無くても私にはある」

「今でなくてもいいだろ？　もう直ぐクラスリーグマッチなんだからその時で」

その言葉でボーデヴィツヒの殺気が膨れ上がる。  
不味い。

俺がそう思った瞬間、ボーデヴィツヒは右肩の砲身を展開する。

「ならば……」

そう言いながら行き成り発砲。

クソ！！

俺はビームライフルを構え正射し、レール砲の砲弾を一夏とボーデ

ヴィッヒの中央で爆発させる様に撃ち落とす。

「何!?!」

ボーデヴィッヒは突如何が起こったのか理解できず驚きの声を上げる。

俺はその隙を逃さずイグニッションブーストで一氣にボーデヴィッヒとの距離を詰めて居合いの要領で右マニピレーターで左サイドスカートにマウントされているビームサーベルを引き抜き、即座に最大出力でボーデヴィッヒの右わき腹に叩き込む。

「ゴハッ!?!?!?!」

訳も解らず何が起こったのか理解できないまま苦悶の吐息を吐くボーデヴィッヒ。

最大出力でもリミッター付きだから絶対防御は破壊できないが、その衝撃までは殺し切れない。自然とボーデヴィッヒは左横に吹き飛ばされる形でアリーナのシールドに叩き付けられた。

「ガッ!?!」

そのまま、地面に叩きつけられる格好でうつ伏せに倒れるボーデヴィッヒ。

俺は更にイグニッションブーストで移動し、ボーデヴィッヒの後ろから両足でボーデヴィッヒの両肩を踏みつけ銃口を頭に近づける。

「もういいだろ? これ以上無益だ」

俺の言葉にボーデヴィツヒは俺を睨みつけながら無言を貫く。

『其処の生徒！！何をやっている！？』

大音量で管制官の先生が注意してきた。

俺はボーデヴィツヒから飛び退き、ボーデヴィツヒに手を差し伸べた。

「立てるか？」

「無用だ！！」

ボーデヴィツヒは悔しさと恥ずかしさと怒りで頬を赤らめながら俺の手を叩いて自分で立ち上がった。

その顔には薄っすらと泥が付いている。

ボーデヴィツヒは無言で立ち去った。

私ことラウラ・ボーデヴィツヒは今、屈辱の極みにいた。

その理由は先刻の戦闘、いや、一方的な戦いだった。

私の当初の目的は織斑　一夏の威力偵察に過ぎなかった。

だが、そこで予想外の、そして屈辱の結果に終わった。

最初はどうでもいい唯の男と思った。ISを唯のファッションしか考えないこの学園のレベルで学年最強など大した事無い。

侮っていた。

そう言われればソレまでだが、その侮りをした自分が許せない。

奴は私が放ったレール砲の砲撃を織斑　一夏と私との中央で狙撃した。

音速を超える速度で飛翔する弾頭を迎撃だ！？

ふざけた能力だ。

奴はソレだけには飽き足らず、私が認識できない速度で近付き私の横っ腹に斬撃を見舞った。

シールドや静止結界すら発動させない見事な奇襲だった。

そして、私はアリーナのシールドに叩き付けられ地面に這い蹲った。

コレではまるで私が敗者ではないか！！

私は怒りに任せて立ち上がろうとしたが両肩を足蹴にされ、後頭部に銃口を突きつけられた。

さらに奴は事もあるうに敗者である私に手を差し伸べた。

つまり私は敵とすら認識されていなかった。

軍人として、戦士として、また、ドイツ最強のIS特殊部隊隊長として、この上ない屈辱であり恥辱であり汚辱だった。

文字道理、私のプライドは泥に汚れ汚された。

教官が仕込んでくれたこの技術を奴は足蹴にした。

許せない！！

何より許せないのはあれ程の実力があるにも関わらずこの様なこつこ遊びしかない所で燻る奴自体が許せない！！

この際、もう織斑　一夏などどうでもいい！！

「アスラン……ザラ！！　赤い騎士王！！」

私はその男の名と異名を魂に刻んだ。

「奴は私の敵！！」

奴だけは私が倒す<sup>ひてい</sup>る！！



第12話 アスラン黒兎を取り逃がす（後書き）

ラウラフラグがたったか？

### 第13話 アスラン女の喧嘩を止める

俺こと一夏は珍しく箒が部屋に尋ねてきた事に何となく喜びを感じながらも部屋に招こうとした。

だが、箒は戸口でいいと言われ残念でならない。

「あのだな……」

「おう……」

箒はシドロモドロになりながらも何かを言おうとしている。

しかし、此方もなぜか緊張する。

「わ、わ、私がトーナメントで優勝したら」

「優勝したら？」

「私と付き合ってくれ!!」

その言葉に俺は二つ返事で答える。

「買い物だろう？」

「何で其処までの覚悟しなけりやならないんだ？ 箒の奴？」

俺が教室に到着した時、いつも以上に騒がしい。

俺は鞆から教科書を取り出し机の中に仕舞い鞆を机横のフックに引っ掛けるとセシリアに質問した。

「セシリア、一体何の騒ぎだ？」

その質問にセシリアはその可愛らしい人形のような端整な顎に手をやりながら答える。

「多分、ですけど1年の間でクラスリーグに優勝したら一夏さんと付き合えると言う噂が流れていますわ」

俺は首を捻った。

「付き合うと言う言葉にも意味は色々あるだろ？ ソレは買い物に付き合うとか食事に付き合うとかって言うオチじゃないのか？」

セシリアは苦笑しながらこう答えるしかない。

「まあ、一夏さんですし……そんな事……ありえますわね……」

「まあ、大方、箒か鈴が『優勝したら私と付き合え』と言ったのを聞き耳立ててた女子が広めて話が大きくなったと言った所だろう？」

「なんとも解り易い想像図ですわね……」

俺もセシリアの言葉に頷きながら答える。

「全く、一夏相手に付き合ってくれただけしか言わないとは……アイツの場合、「異性として貴方を愛しています交際して下さい」くらい言わないと解らんと思うぞ?」

「……それは貴方も同じでは?」

「何か言ったか? セシリア」

「いいえ、何も」

俺はセシリアの小声が聞きとれず、質問したがセシリアは優雅な振る舞いで俺の質問をいなした。

俺は授業中や休み時間でも視線を感じる。

犯人は解っている。

ボーデヴィツヒだ。

まるで此方を舐める様に見られる。

正直、奇襲や強襲される訳ではないのか今は静観しているが、正直、辟易してるのもまた事実。

困った者だ。

私ことセシリアは鈴さんと一緒に訓練していた。

なぜ、鈴さんかといえば、アスランさんの戦闘スタイルが比較的似通っているからである。

そう言う意味で戦略の研究や検証がし易い。

少しでもアスランさんの負担を減らして差し上げたい。

「何で私がアンタと訓練しなくちゃならないのよ？」

鈴さんは不満タラタラだが知った事ではない。

アスランさんが私とパートナーになってくれるのだ。

コレぐらいの愚痴は覚悟の上だ。

少しでもあの方に近付きたい。

あの方のパートナーとして恥ずかしくない自分でいたい。

それが今の私の目標だ。

その為には、あの方の為に私が出来ることを私はしよう。

そう決めたのだ。

「と、言う訳で、訓練は私と鈴さんの1オン1、勝敗は相手のシー

ルドエネルギーエンプティーでよろしくて？」

その言葉に鈴さんは挑発的な笑みを私に向ける。

「ええ、いいわよ。丁度、順位はつけたかったし」

「合図は譲りましてよ」

「あら、優しいじゃない」

その言葉に私は微笑みながら言う。

「淑女の慈悲ですわ」

「上等!!」

私の言葉に鈴さんの闘志に火がついた。

（解り易い）

私は内心、鈴さんが策に引かなかった事に微笑んだ。

「行くわよ!!」

そう言って鈴さんがスタートダッシュしてきた。

（案の定ですわ）

私が攻撃しようとしたその時だった。

「「ッ!？」」

ハイパーセンサーに警告ですって!？

私と鈴さんはその場を飛び退く。

その中央を超高速の弾道が通り過ぎていった。

そしてお互い飛んできた方角に兵装を向ける。

「弾道が放電していた!？」

「レール砲……ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

ハイパーセンサーの索敵で直ぐに見つけた。

相変わらず高い所がお好きなのかアリーナピットカタパルトの射出口に立っていた。

「アンタ!! 如何い一つもり!？ 行き成りぶつ放すなんて!？」

鈴さんの言葉に耳も傾けず一人で喋り出すボーデヴィツヒさん。

「中国の甲龍に、イギリスのブルーティアーズか……」

その言葉と共に突如、鼻で笑うボーデヴィツヒさん。

「フツ、カタログスペックを見たが、実物を見るとたいした事が無いな」

どうやらその言葉に鈴さんは頭にきたのか声を荒げるが今さらだ。

アスランさんのインフィニットジャスティス。

アスランさん曰くガンダムタイプISと言うカテゴリーにされるISと比べると私達のISなどどうしても見劣りしてしまうのもまた事実です。

実際、アスランさんの話を聞くだけで詳細データまでは見た事が御座いませんが、アスランさんの話を聞く限りではあの篠ノ之博士すら開発不可能な技術のオンパレードだと思いますわ……

それは兎も角、私はどうでもいいと言わんばかりに鈴さんに語りかける。

「鈴さん、礼儀を知らない人間に礼儀を諭すのは構いませんが、私達に時間が無いのもまた事実。ここはコレまでとして、練習を再開いたしませんか？」

その言葉に鈴さんは私に噛み付いた。

「ちょっと！！ セシリア！？ アンタ！！」

私は鈴さんの目の前に手を翳しながらボーデヴィツヒさんこう言った。

「貴女のターゲットはアスランさんでは無くて？ ソレを態々、私達に喧嘩を吹っかける理由は何処にありますの？ 多分、アスランさんをおびき寄せる餌にする為ではなくて？」

その言葉にボーデヴィツヒさんの眉根が僅かに上がる。

「沈黙は肯定と受け取りますわ。貴女はアスランさんをずっと監視していた。多分、奇襲、強襲の隙を窺っていたのでは？ でも、その隙は微塵も無かった。違いますか？」

これまたボーデヴィツヒさんは沈黙を貫く。

「そこで、貴女は私達と戦い、騒ぎを聞きつけたアスランさんとなし崩し的に戦う事を選んだ。何故ですか？ 貴女が真に強者の自負をその胸に抱くならトーナメントに出れば確率的にアスランさんと当たれるはずですね。更に、公衆の面前でアスランさんを撃破できれば貴女とドイツの有用性は国内外に響き渡りますのに。何故、ソレをしないと？」

その言葉にボーデヴィツヒさんは言います。

「こんな極東の島国の学園で見世物小屋宜しく戦うなど私の矜持が許さん。それにあの男、アスラン・ザラは私に恥をかかせた。私だけでない。教官の技術すらあの男は足蹴にしたのだ。この場で倒さなければ私のプライドが許さない」

その言葉に私が考えながら言う。

「教官とは織斑先生のことですか？」

その言葉にボーデヴィツヒさんは怒りを剥き出しにして目を見開いた。

「貴様如きが教官の名を軽々しく呼ぶな！！」

そう叫びながら彼女は私目掛けレール砲を撃ち込むが私はアンバツ

クを使って回避した。

「弾道が読み易いですわね。もう少し、考えて砲撃をする事をお勧めいたしますわ」

私の言葉に怒りを露にするボーデヴィツヒさん。

「いいだろう、生かして置く心算だったが貴様は血祭りに上げる。セシリア・オルコット」

「あら、悪役臭い台詞です事、もう少し優雅な言葉で表現できませんか？ アスランさんなら私以上に優雅な言葉で舌戦をしましてよ？」

その言葉にボーデヴィツヒさんは鼻で笑った。

「フン、言葉を開けばあの男の名。全く、あんなアイドル気取りで織斑 一夏と戯れるガチホモ野郎の金魚の糞風情が言ってくれる」

今、何と言った、この女。

アスランさんを侮辱した？

……

……

……

…… コロス ……

クロス！！

ぬっ コロス!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ブチケルッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

だが、今まで淑女の情けとして触れなかった所を付いてからだ。

ここまでコケにされたとあってはセシリア・オルコットの名が泣く。

何より許せないのは私が愛し、尊敬するアスランさんをここまでコケにされた事が許せない。

コレを言つたら後には引けないが女のプライドがその躊躇われた一線を越えさせた。

「あらゝそのガチホモ野郎にフルボツコにされて情けを掛けられたのは何処の何方だったかしら？」

空氣が凍った。

文字通り比喻でも何でもない。

あのラウラ・ボーデヴィツヒの顔が屈辱で歪む。

そして、右目だけを怒りに染って顔すらも怒り心頭になった。

「……どうやら早く地獄に旅立ちたいらしいな……」

「あら？ 事実を受け入れられないなんて、軍人失格ですわよ？  
負け黒兎さん」

ここでも私はあの女に失笑と共に事実を突きつける。

「殺す！！」

「上等ですわ！！」

その瞬間、私とあの女はバトルを開始した。

あの女はワイヤーブレードを数機展開し私を取り囲む。

が、遅い。

余りに遅すぎる。

「スロー過ぎて欠伸が出ますわ！！」

私は、アンバックとバレルロール回避を併用して距離を取る。

「クッ！！ チョコマカと！！」

私は動きながらライフルをラウラさんに正射した。

ラウラさんはワイヤーブレードを引き戻し、回避行動を開始した。

だけど、させませんわ！！

私はブルーティアーズをパージしてあの女の周辺に不規則機動を取

らせて砲撃させる。

「クツ！！　ここまでビットを操れるか！？　舐めていた」

そんなに数がいたのではAIC、静止結界は使えないでしょ？

悪いですが、アスランさんから情報はしっかりと貰っていきましょう。

AICの弱点、それは一方方向に強く、実弾兵装には協力無比ですが、ソレはあくまで正面での戦闘の話であり、認識できる速度だからこそですわ。

更に膨大な集中力が不可欠。

このBTに搭載されているレーザーは光速、つまりは光の速度で動いていますわ。

それを認識出来るのははっきりってアスランさんくらいですわ。

更にオールレンジ攻撃をしながら本体も攻撃に加わる計五方向からの攻撃、コレを早々かわせませんわよ！！

「だが、甘いな！！」

そう言いながらあの女はイグニッションブーストをして、私に加速した。

「ビットもコレだけ近付かれては使えまい！！」

その通り。

ビットはあくまで移動砲台。

ビットの弱点は急加速による接近戦ですわ。

せも、私にはアスランさんから仕込まれた“切り札”がありましてよ。

プラズマ手刀を展開して、接近戦を試みる。

もう少しですわ。

その時だった。

突如として邪魔が入る。

織斑先生とアスランさんだ。

「やれやれ……これだからガキの相手は疲れる」

「セシリア、君らしくないぞ！！ 冷静になってこの場は引け！！」

そう言われて頭に上っていた血が引いていくのが解る。

あの女も毒気が抜かれたのか刃を納める。

どうやら女子生徒が呼んで来たのだろう。

鈴さんは私達の試合を観察していた。

抜け目がありませんわね……

「訓練するのは構わんが、アリーナを破壊されては堪らん」

その言葉に私は周りを見た。

確かに、アリーナのグラウンドは穴だらけで観客席のコンクリートも所々穴が開いている。

コンクリートが内部から吹き飛びアリーナ内部のシールド発生装置に当たって壊れていた。

戦いの凄まじさを物語っていた。

突如、アスランさんは私の耳元で話す。

「セシリア、“アレ”まだ完成段階じゃないだろ？ 使つのが早すぎる」

「ですが!？」

「完成させるからソレまで使つな。いいな？」

「はいですわ……」

その言葉に私は項垂れて答えるしかなかった。

「おい、ザラ。オルコットの手綱くらいしっかり握ってる。アリーナが壊れかけるまで戦わせるな。修理費も馬鹿にならんだぞ？」

「解りました……」

アスランさんは頭を下げると私を伴ってアリーナを後にしました。

「って、私の存在忘れてるわよ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「……………」

鈴さんが叫びますが知った事じゃありません。

私にとってアスランさんが最優先です。

## 第14話 アスラン主になる

セシリアとボーデヴィツヒの私闘から数日。

セシリアとボーデヴィツヒは顔を付き合わせることに睨み合いをしていた。

正直、女同士の戦いとは男にとって真に恐ろしいもので見たものではない。

俺は居心地悪い空間から逃げる為にどうにかあの手この手で2人の接触を避けている。

織斑先生の通達でリーグ戦前の一切の私闘を禁止された事からも彼女達のフラストレーションはたまる一方だ。

まあ、セシリアの怒りの理由は解っているだけに嬉しく思う反面、この状況にも辟易しているのもまた事実であった。

一夏は同じ部屋のシャルルと組む事が判明した。

同じ部屋でもあの二人の仲の良さは尋常じゃ無い気がする。

一夏に男色の趣味は無かった筈だが。

まさか、目覚めたとかいう冗談は止して欲しい。

まあ、一夏の目線から一夏もヤツパリ男の子なんだと言う事が解る。

たとえば、無意識で筭の胸を見てたり、鈴のお尻を見てたりと無意識で男としては枯れていないらしい。

2人もその手の視線に曝される経験が無いのかそれともあからさまではないのか気が付かない所ではあるが。

俺はその事を指摘しない事になっている。

同じ男だ。

解らんでもない。

だが、若いな。

その目線を隠せる様にならないといけないぞ。

敏感な奴は気付いて指摘するからな。

余談は兎も角、数日はあつと言う間に過ぎていく。

いよいよ、クラスリーグマッチが開かれる。

俺、一夏、シャルルは更衣室のモニターでその様子を見ていた。

「しつつかし、スゲー人だな……」

一夏は感心しながらもモニターを見つめた。

「3年はスカウト、2年は今までの成果を発揮する場だからね」

シャルの言葉に俺は頷きながら答える。

「ISを保有するイコール強大な軍事力を持つと同義語だからな。幾らアラスカ条約で軍事目的の使用を禁止していても軍事力としての抑止力は働いているんだろう。ISは兵器としてみたら破格の戦闘能力だからな。しかも機体数は限られている。ソレこそ有能な人材を乗せて国家の力とするのは自明の理だ。更に言うならIS開発競争も今後激化する。その為に各企業も優秀な人材をスカウトしたいのは企業の本音だ」

その言葉を聞いて一夏もシャルも苦い顔をした。

まあ、一夏はISが単なる競技程度に考えていたのだろう。

シャルルは父親がデユノア社の社長だ。

余りいい話をしている訳では無いのが解っているだけに余りするべき話では無かったかもしれない。

暫くして、対戦表が画面に映し出された。

「おいおい……」

「これって……」

「組み合わせの妙と言う奴か……成る程、これまた面白い」

上から一夏、シャルル、俺の順番に口を開く。

其処には1年第1試合が俺とセシリアのペアー対ボーデヴィツヒと  
第のペアーだった。

コレは何とも。

「行き成り、1年の決勝戦だね……」

シャルルはそう言いながら画面を見つめた。

「ああ……」

一夏もそれに同意する。

別に、決勝と言う気持ちは無い。

俺にとって戦いとは正に命懸けだ。

軍隊と言う所にいて戦場を経験すると死ぬ時は英雄だろうが頂点だ  
ろうが死ぬ時はアツサリ死ぬものだ。

「まあ、結果は如何あれ、勝ちに行くさ」

俺はそう言いながらスपोर्टドリンクを飲んだ。

私こと篠ノ之 箒は目の前の対戦表に驚いていた。

「まさか、この様な事になるとは……」

そう、嘗ての自分に似ているラウラ・ボーデヴィツヒと組むしかも相手はアスランとセシリアのペアー。

何と言う事だ。

こんな事があり得るのか？

ボーデヴィツヒはあの頃の私と同じだ。  
力を信奉し唯、力を追い求めた頃の私と。

今の私ではどんなに頑張ってもアスランには及ばない。  
セシリアもアスランの元でメキメキと力をつけて来ている。

その成長速度は異様と言ってもいい。

それこそ、私が劣等感を抱くほどの成長速度だ。

勝ちたい。

ソレが私の素直な感想だが同時に勝てないという、相反する感情が渦巻いていた。

俺とセシリアはピットカタパルト前で待機していた。

『それでは、1学年クラスリーグマッチを開催いたします』

ソレを聞いた俺はカタパルトまで歩み寄る。

「それじゃあ、セシリア、戦場で待ってるぞ?」

その言葉にセシリアは頷きながら微笑む。

「ええ、私も直ぐ後を追いますわ。アスランさん」

俺はセシリアに人差し指を突き出し、ソレをセシリアの口に当てる。

「アスランだ。お前は俺のパートナーなんだ。そんな他人行儀に呼ばないでくれ」

その言葉にセシリアは頬を赤らめながらも反論する。

「ですが……」

「アスラン、だ」

セシリアは何故か照れ臭そうに俯き加減でモジモジしながら頬を更に赤らめ俺の名を呼んだ。

「……アスラン……」

「よし！」

俺は嬉しそうに笑いながらそう言った。

「その笑顔は反則ですわ……」

小声で何を言っているのか解らないがまあ文句だろう。

「さあ、行こう。セシリア、俺の背中、お前に預ける。その代わり、お前の前は俺が絶対に守る」

「ええ！！ アスランの背中、このセシリア・オルコットが死守いたしますわ！！」

その言葉にセシリアは真っ赤になりながらも微笑みをその端整な顔に湛えながら力強く答えてくれた。

何か、背中が温かい。

この世界に来てから感じた事の無い暖かな背中。

ああ、そうか俺はパートナーが欲しかったんだ。

この空虚な背中を守ってくれるそんな存在が。

C・E・ではキラがそうだった様に、今はセシリアがパートナーなんだ。

俺はそう思いながら俺はこう言った。

「体が軽い……こんな幸せな気持ちで戦えるなんて初めてだ……もう何も怖くない！」

俺はジャステイスを起動させる。

俺はカタパルトを思考制御で操作し、ジャステイスを固定させる。

「アスラン・ザラ、ジャステイス、出る！！」

そついい発進させるとジャステイスは戦場へと舞い上がった。

セシリアはアスランが飛び立った後を見つめながら考える。

「私は、貴方に認められたのですね……アスラン」

セシリアは心躍らせながらカタパルトに乗り込みブルーティアーズをロックする。

「セシリア・オルコット、ブルーティアーズ、行きますわ！！」

そついいセシリアは飛び出していった。

自分のパートナーが待つ戦場へ。

俺は上空でバレル上昇しながらVPS装甲を展開する。

その瞬間、会場中がどよめく。

そして、上空で静止し、ユックリと地上へ下り立つ。

其処にはボーデヴィツヒと箒がいた。

暫く無言で睨み合う3人、セシリアも其処に加わる。

役者は揃った。

後は開始の戦鐘が鳴らされるのを待つばかりだ。

『それでは、第1回戦、アスラン・ザラ、セシリア・オルコットペー対、ラウラ・ボーデヴィツヒ、篠ノ之 箒ペアーの試合を行います』

その瞬間、俺はビームライフルを構え、セシリアはレーザーライフルを構える。

ラウラはレール砲を正面に展開し、箒は打鉄の日本刀型兵装を構える。

『始め！！』

「「「「ッ！」「」「」」

4人は一斉に空へ飛び立った。

俺は即座にセシリアに指示をだす。

「セシリア！ アタックフォーメーション？！」

「了解ですわ！！」

その瞬間、俺が前衛、セシリアが後衛の陣形を取る。

そして、ラウラが発砲するが俺が射撃したと同時にセシリアがスイッチした。

ラウラはシールドを展開するが俺の射撃でシールドが粉碎される。

「何！？」

セシリアのレーザーを箒も何とか防御するがエネルギーは持っていられる。

それをお互いが複雑な機動を描きながらスイッチングしていく。

「クツ！？ 何て複雑なスイッチングだ！ 複雑なスイッチング途中でも射撃しているだ！？ あいつ等自滅する気か！？」

ボーデヴィツヒは回避しながらも叫ぶ。

そう、下手に動くと高速でお互いがぶつかるとし、複雑な機動のスイッチング中に射撃などフレンドリーファイヤーだ。

何故、意思疎通が出来る！？

ラウラの顔にそう書いていた。

まあ、セシリアとの個人練習で腐るほどこれはやった。

だから、セシリアの移動速度に合わせて俺が動けばいいだけだ。

よし、ボーデヴィツヒと箒の分断に成功。

『セシリア、作戦第1フェイズは完了。第2フェイズへ移行する』

『了解ですわ』

プライベートチャンネルで音声通信をしながら俺達は連携を取った。

ボーデヴィツヒ、悪いがコレはチーム戦だ。

先ず箒から片付ける。

俺はビームライフルをリアスカートにマウントしてビームサーベルを引き抜くとイグニッションブーストで接近し左から右へ横薙ぎに切り払う。

「な！？」

箒は反応できずに切り裂かれ、シールドの3分の2を消費する。

しかし、ボーデヴィツヒは俺に砲撃しようとするが甘い。

セシリアが牽制砲撃でボーデヴィツヒを足止めすると同時にビットを射出し箒に砲撃する。

そして、箒はまともにビットのレーザーをくらいシールドエネルギーがエンプティーとなる。

「クッ!！」

箒は悔しそうに歯噛みした。

開始早々30秒で撃破されたのだ。

悔しさも解る。

『箒の沈黙を確認。次は本命だ。抜かるなよセシリア』

『当然ですわ。アスラン』

プライベートチャンネルでやり取りして作戦は最終段階であることを告げる。

セシリアもその声を持って答えた。

「足手まといがいなくなって楽になった。感謝する」

ボーデヴィツヒはそう言いながらレール砲を乱射するが俺とセシリアは簡単に回避して倍返し of 射撃を浴びせる。

「クッ!？」

ボーデヴィツヒは何とか回避するがそれでも間に合わず次々とビームとレーザーを喰らう。

俺は接近戦を仕掛けるべくビームライフルをマウントしてビームサーベルを引き抜く。

そして、イグニッションブーストでボーデヴィツヒとの間合いを詰めた。

しかし、ボーデヴィツヒもイグニッションブーストを機動し、俺の間をすり抜ける。

「先ずは邪魔なお前からだ!!」

目的はセシリアか。

セシリアに接近戦を挑む気か。

セシリア、“切り札”を使うときだぞ。

私はあの女、セシリア・オルコットに強襲を掛ける。

（接近戦兵装はナイフ1本のみ。ならば、プラズマ手刀で切り刻む！！）

そして、私はあの女の懷に潜り込みプラズマ手刀を展開した。

「取ったぞ!!」

私は撃破を確信した。

しかし、あの女は笑っていた。

私はあの女、ラウラ・ボーデヴィツヒがまんまと此方の策に乗ってくれた事に笑みが零れますわ。

（なんて迂闊な）

私はレーザーライフルを粒子化して消し去り、両手に切り札を用意した。

そして、あの女の直線的な突きを足を滑らすように回避して両手の切り札を構える。

そう、コレはアスランが開発したレーザーアックスライフルショットー。

銃身を極限まで切り詰め、アスランが開発した超小型レーザー発生装置と低電力消費型ドライブを搭載したハンドガン型レーザー銃ですわ。

バレル下部にはビームコーティングされた小型アックスが装備されていますわ。

つまり、近接格闘から近接射撃の2種類の用途に対応した私だけのオリジナル武器。

私はレーザーアックスライフルショットターの銃口をあの女の腹部に押し当てて引き金を聞く。

毎分1200発のレーザー弾があの子の腹部にめり込む。

スターライトmk?の30パーセント低下の威力だが至近距離なら十分ですわ。

「ゴフッ!?!?!?!?!?!?!?」

あの女はマトモにソレを腹部に受けて後退しました。

私は、こんな所で負けるのか？

極東の島国で、こんなISをファッションか何かと勘違いする様な奴等に……

そして、私の汚辱を雪ぐ機会すら奪われるのか！？

その瞬間、頭に何かが響いた。

力を、  
欲しますか？

私はソレを望んだ。

何だ！？ ボーデヴィツヒの様子が可笑しい？

次の瞬間、ボーデヴィツヒのISが何やら黒い物体と化しボーデヴィツヒを飲み込んだ。

「いやあああああああああああああああー！」

ボーデヴィツヒの悲鳴と共にボーデヴィツヒは黒い物体に飲み込まれていく。

そして、突如鳴り響く警報。

『緊急事態発生。レベルD以上の緊急事態が発生しました。全試合は中止。来賓、ならびに全生徒は速やかに非難。教師部隊は速やかに鎮圧を行って下さい』

アリーナの観客席シャッターが一斉に下ろされる。

どうやらアレはただ事では無いらしい。

そして、黒い何かが人を形作る。

そして、ソレは剣を持った何かになった。

そして、次の瞬間、俺に斬りかかる。

しかし、その速度が尋常じゃない。

（速い！？）

俺はシールドを突き出しビームシールドを展開した。

「重たい！？ クツ！！ 俺にシールドを使わせた！？ 何だあれは！？」

人形の剣は弾かれ踏鞆を踏みながら後退する。

俺はビームサーベルを引き抜くとソレを構える。

しかし、俺が踏み込もうとした瞬間、一夏が割り込む。

「くっそおおおおおおお！！ 千冬姉の真似しやがって！！」

次から次へと何だ！？

しかし、一夏の剣は軽くかわされカウンターを貰う。

弾き飛ばされた一夏は地面に叩きつけられながらも立ち上がり向かうとする。

「おおおおおおおおおおお！！」

「一夏！！ 一体何した！？」

俺はビームキャリーシールドのグラップルスティンガーで一夏を拘

束した。

グラップルステインガーの捕獲部分に捕らえられた一夏は叫びながらもジタバタした。

「何すんだよアスラン！？ アイツは千冬姉の真似してる奴を俺は倒さなきゃならないんだ！！ 邪魔するなお前も！！」

流石にキレた一夏を放置する訳には行かず正気に戻す為にぶん殴った。

「ゴハッ！？！？」

「落ち着いたか？」

殴られた頬を押さえながら一夏は俺を睨みつける。

「理由を話せ。今のお前は正直、理解不能だ」

俺の言葉に一夏は怒り心頭で怒鳴る様に答える。

「アイツ、千冬姉の真似してるんだよ！！ あの剣技は千冬姉のものだ！！ ソレを他人が真似するなんて許せねえ！！ ぶん殴つてやる！！」

クダまく一夏を俺は反対側の頬を殴り飛ばした。

「いい加減にしろ！！ お前は唯、お前の思い出を汚されるのを恐れて怒っているだけだ！！ 織斑先生を理由に甘えるな！！ 織斑先生を理由にして暴れるな！！」

俺の叫びを聞いた瞬間、冷や水を浴びせられた様に大人しくなる。

「悪いが、一夏。お前は織斑先生の背中しか見ていない。周りを見  
てみる？　ここには箒がいる。セシリアがいる。鈴もいる。シャル  
ルもいる。そして及ばずながら俺もいる。お前が全て守りきるには  
チョット人数が多いぞ？　更に言うなら一夏、お前一人で何人を守  
りきれる？　全員は無理だろ？　俺も全員守りながら戦うなんて不  
可能だ。だから、仲間がいる。俺を支えてくれる仲間が……なら言  
えよ。一緒に戦ってくれって……助けてくれってさ。頼るのは弱さ  
じゃないんだ」

一夏は周りを見た。

其処には箒が、セシリアが、鈴が、シャルルが俺がいた。

「それとも、俺達が頼りないか？　なら、俺はお前に友と認められ  
ていない証拠だな」

俺はそう言いながら苦笑した。

俺はアスランの言葉を聞いた瞬間、自分が小さく見えた。

そうか、この怒りは千冬姉の剣を汚されたからじゃない。

俺自身の思い出を汚されたから怒ってたんだ……

アスランの言うとおりだ……

俺は千冬姉に甘えていただけなんだ。

千冬姉を理由に暴れていた。

そう言われた瞬間、俺は何もする事が出来なかった。

俺自身が俺自身に振り回されている。

千冬姉が言ってたっけ。

『武器に振り回されるな。武器の主になれ』って……

俺は結局、自分の力に酔って振り回されただけだった。

さらに悪い事に千冬姉の剣を理由にして暴れていただけの事だ。

情けなさ過ぎて涙が出そうだ。

「アスラン、もういい。俺は確かに千冬姉を理由に暴れたただけだ。認めるよ。自分の弱さを、でも、俺の思い出を汚されたんだ。黙って見てもらえない。俺は俺の誇りの為に戦う。千冬姉でも誰でもない俺自身が俺自身の誇りの為に戦いたい。だから……」

俺が言葉を言おうとした時、箒は答える。

「安心しろ！ お前は私が守る。だから思いっきりやれ！」

鈴も答える。

「一夏！ 負けたら承知しないわよ？」

シャルルも答える。

「一夏、負けたら女装して校内一周だからね？」

セシリアも答える。

「アフターサービスはお任せを」

そして、アスランも答えた。

「後の事は気にするな。俺が何とかする。織斑先生への言い訳もな？」

ああ、俺にはこんなに支えてくれる仲間がいる。  
こんな嬉しい事は無い。

俺は零落白夜を展開して光の刃を形成する。

「来いよ、偽者野郎。俺自身が相手だ」

確かにコイツは千冬姉の剣技だ。

だが、それだけだ。

織斑 千冬ではない。

俺は偽者の袈裟懸けをかわすと縦一文字に刀を振り下ろす。

突如、ボーデヴィツヒを包んでいた外壁は剥がれ落ち、奴が出てきた。

「これでいい。俺も、人の事言えねえしな」

こうして、事件は一先ずの終息を見た。

暫くして俺は今回の事件の資料を作成、織斑先生に提出した後、教室に帰った。

そして、其処にはシャルルの姿が無い。

そして、何だか歯切れの悪い山田先生が現れる。

「えっと、また、転校生を紹介します」

「シャルロット・デュノアです」

「なんと、デュノア君は、デュノアさんでした……」

何とまあ、どう言えば良いのやら……

「すると織斑君はデュノアさんと一緒に暮らしていた事に……」

一人の女子の一言で筈が激昂、ISフル武装の鈴まで乱入する騒動となった。

その騒動が鎮静化した後、突然ラウラが教室に入ってきた。

「アスラン・ザラ」

「何だ？ ボーデヴィツヒ？」

その言葉に全員の緊張が走る。

「織斑 一夏から聞いた。貴様は奴等の師匠だそうだな？」

その言葉に俺は苦笑しながら答えた。

「確かに俺は戦い方を教えているが師匠なんて大層な物じゃないさ」

俺の言葉にボーデヴィツヒはこう答えた。

「なら私を弟子にさせていただきたい。マイスター」

は？

「日本では師匠をドイツ語にするとマイスターになるだからそう呼ばせてもらう。貴方の強さに感銘を受けた。どうか私にその戦いのご指導を」

何だか前途が多難だ。

更に、一人の女子の一言を聞いたラウラの一言が場を混乱させた。

「まあ、マイスターの略にはご主人様って言う意味もあるわね……」

「フム、ご主人様か……それも悪くない……我が主と呼ばせてもらうか？」

ソレは止めて!!

俺が通報されるから!!

マジ止めて!!

くそ、何でだ!?

何かセシリアの顔は笑ってるけど目が笑っていな!?

コワ!?

誰か助けてくれ!! 切実に!!

## 第14話 アスラン主になる（後書き）

セシリアのオリジナル兵装はストライクノワールとケルデリムの兵装を参考に考えました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9728y/>

---

ISアスラン戦記

2011年12月8日06時10分発行